

---

# 転生NEXT

虹鮫連牙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生NEXT

### 【Nコード】

N6798Y

### 【作者名】

虹鮫連牙

### 【あらすじ】

真つ暗な世界から神様の導きでやって来た場所は、テレビアニメ『魔法少女リリカルなのは』の世界。転生者となった男は、原作に介入して悲しい運命に立ち向かう。「俺の名前は、碎城院聖刃だ！ 合言葉は、絶対原作介入主義！」この作品は、Arcadiaにも投稿しています。

## NEXT 1：転生者、誕生

悲しい運命なんてまっぴらごめんだ。

お前の考えた生き方なんて。

お前の作りだした道なんて。

お前の決めた運命だなんて。

俺は絶対に認めない。

そうだ、運命ってやつは自分自身の手で切り開いていくものなんだ。だって皆もそう言っているじゃないか。

幸せになる権利は誰もが持っているものだ。

でも、不幸になる義務は誰にもない。

だから、“俺はここにいる”。

「俺は……………」

意識が覚醒した瞬間に解ったことは、俺に形が無いということだった。

今俺がいる場所、というよりも俺の意識が存在する場所は、端から端まで真っ黒な場所。上下が分からないとか、どこまでも広がっているとか、そういう三次元的感覚さえも感じられない。

見渡せないし、澄ます耳も探る手足も無い。呼吸することさえも忘れてしまっているかのよう。

だから俺は、自分に形が無いのだと思った。

「俺は、何？」

「あのお……………聞いていただけますか？」

「はい？」

突然の声。耳なんて無いはずなのに、確かに聞こえた。

そう思っていたら、無いはずの目で見てみたいに、声の主がそこにいた。

「こんにちは」

「うおおっ！ いつの間にいー!？」

無造作に波打つ金色の天然パーマを右手で掻きながら、頬を赤らめた少年がそこにいた。真っ黒な世界なのに不自然なほどはつきりと見える素肌は色白。身に纏う衣服だって本当の意味での純白だ。まあ、衣服と言っても一枚布をすっぽりと被っているだけのような簡素なものだけだ。

「驚かせてすみません」

「え、ちよつと……あんだ誰？」

少年は俺の質問を聞いていないのか、なにやらモジモジとした様子で、だけど真っ直ぐに俺のことを見ながら言った。

「実はですね、あなたには『転生』していただきたいと思いつて」

「……………はい？」

用件を言うより先に、言うことってのがいっぱいあるんじゃないのか。そう思いながらも、彼の言葉が俺に届いた瞬間、何か妙な温かさを感じた。

それは体の無い俺の隅々を駆け巡る、波紋のように広がっていく何か。それを感じ取ると、俺はある変化に気が付いた。

動いた。

無いはずの体が動いた気がして、俺は自分を見ようとした。

そう、形が無いはずだったのに、俺は自分自身を目で見ようとしたのだ。

「どういうことだ……これ？ 俺、どうなってるんだ？」

「今、あなたには転生するための準備が始まっています。もうすぐで転生が完了しますから」

「テンセイって一体なんだ？」

「転生が完了すれば自然と分かるかと思いますが」

少年は続けた。

「あなたには、これから『魔法少女リリカルなのは』の世界に誕生していただきます」

その言葉を聞くのと同時に、全身を駆け巡っていた異変が更に慌

しさを増した。

広がっていた波紋はやがて、命を感じさせる脈となり、肉体を描く輪郭となり、存在を示す色となって、俺を完成させていく。

「……………転生？ ……………リリカルなのは？」

「はい。また向こうの世界でご案内しますので、もう少しお待ちください」

少年の言葉を聞きながら、俺はどんどん完成していく自分の体に意識が繋がっていくのを感じ取った。

そして、最初に抱いていた気持ちを思い出していた。

悲しい運命なんてまっぴらごめんだ。

お前の考えた生き方なんて。

お前の作りだした道なんて。

お前の決めた運命だなんて。

「お前つて……………誰だ？」

次の瞬間、真っ黒だった世界は無数のヒビにまみれ、そして音も無く割れて砕けた。

目が覚めた。という表現は正確なのだろうか。

俺は、部屋の真ん中に立っていた。

フローリングの床から伝わる冷たさ。開け放たれたカーテンの向こうには青空。壁に掛けられているものは、黒い学ラン。

ここが誰の部屋なのか。そんな思いが一瞬だけ浮かんだが、それをすぐに忘れるようなことに気が付いた。

体がある。あの真っ黒な場所で徐々に出来上がっていた自分の体が、実在しているのだ。両手で顔や胸や腿を触ってみると、確かに温かさがあった。

しかし、何故か全裸だ。

「転生は無事に済んだようですね」

声のした方向に振り向くと、ベッドの上に腰掛ける人物がいた。その声も、姿も、あの真っ黒な場所で出会った彼そのものだった。だけど、彼の名前が分からない。

いや、というよりも何故少年がこの部屋に？

とりあえず俺は、股間を両手で隠した。

「あの、どうなったんの？」

「徐々に頭で認識し始めるはずですよ。間もなく事情を飲み込めると思います」

その言葉がきっかけだったのかは分からないが、何だか頭の中の更に奥の方から、じわりじわりと滲むように広がるものがやって来た。

俺は一体誰なのか。俺がこの世界にどうやって降り立ったのか。

俺の今いる世界がどういった場所なのか。

「ここは……リリカルなのはの世界？」

「あ、そうですね！ 良かったあ、ちゃんと転生出来てるう！」

『魔法少女リリカルなのは』と言えば、とらいあんぐるなんちゃらとか言うゲームのファンディスクが元となっている、脚本家都築真紀の代表作とも言えるテレビアニメ作品だ。

主人公は高町なのは。優しくて一途な女の子である彼女が魔法の力と出会うことから始まる、ハートフルでガチガチバトルもあってとにかく可愛い子がいっぱい出てくるアニメだろ。

俺は知っている。全十三話の第一期放送を皮切りに今でも続いているこのシリーズ作品は、様々なメディア展開を繰り返している奥深さがあることを。そして、多くの二次創作作品が生まれるほどたくさんの人に愛されていることを。通称『SS』と呼ばれる二次創作小説が数え切れないほどあるのも、このシリーズの人気を物語っている。

そんな、現実ではない世界の中に、今、俺はいる。

そして先程から聞いている言葉、『転生』。

ということとは？

「ま、まさか俺は……………転生オリ主と言うやつか！」

「はあい！ 理解していただけて嬉しいですよ！」

「やっぱり。さっきこいつが言っていたみたいに、時間が経つにつれて、自分の現状を理解出来た。」

「転生オリ主と言えば、二次創作作品において目にするこの出来る設定で、もはや“ジャンル”と言っても良いぐらいメジャーなもの。」

「オリ主というのはオリジナル主人公の略、だと思う。」

「よくあるパターンとしては、神様の手違いで死亡した現実の人間が、お詫びということで神様に好きな世界へ生まれ変わらせてもらう。そうしてアニメ世界に転生した人物が主人公となって物語を紡ぐから、転生オリ主と呼ばれるわけだ。」

「これらの設定はよくSSに使われているが、まさか自分がその転生オリ主になるとは。」

「いや、そんなことよりも思ったのは。」

「こんなことって本当にあるんだな」

「まだ信じられませんか？ ってか、服着ませんか？」

「いやあー、正直SSでしかこういうのって知らなかったからさ。」

「まさか俺の身にこんなことが起こるなんて……………あ、ってことは、あんたが神様か？ なあ、神様だろう？」

「いえいえ、僕が神様だなんてそんな」

「全くテメエ様の不手際で俺を殺すだなんてとんでもない話だよ」

「え、殺すって……………あの」

「でもま、俺は許しちゃうよ。うん……………だってさ、転生オリ主と神様ってきたらさ、アレしかないじゃん？ ましてやここはリリカルなのは世界。もうアレしかないじゃん！？ なっ！」

「うわあ……………絡みづらいなあ、このキャラ」

「正直に言って、俺は胸をときめかせていた。」

「だって転生オリ主と神様の邂逅と来たら、次の展開は既に読めて

いるのだから。

神様の不手際で俺は死に、お詫びとして新たなる命を授かった。

しかし、人の死をそんな簡単に償おうだなんて虫が良すぎる。失った命には、俺の人生があつたはず。生まれてから死ぬまでに積み重ねた歴史があつたはず。それをたかが新しい命一つで賄おうなんて、そんな話があつてたまるか。

そつだ。俺にはもっと多くを要求する権利がある。

俺がこの世界にやって来たということは、すなわち、それなりの生き方をしなければならぬ。

「神様」

「あの、だから僕は」

「俺に」

「はい？」

「俺に、チート能力を寄こせ」

「……………くるとは思っていました、本当にきた」  
当然の要求だ。

ここはリリカルなのは世界だぞ。魔導師達が活躍する世界だぞ。そんな世界にやって来たからには、俺だつて魔法が使いたい。

そして、俺が主人公となるに相応しいほどの力が欲しい。反則と<sup>チート</sup>呼ばれるような、恐ろしいまでに圧倒的で高性能で都合の良い能力が、俺には必要だ。

主人公つて言うのは、誰よりも優れていなくちゃ駄目なんだ。

「さあ、寄こすんだ」

「実はですね」

「まあ、魔導師ランクSSSってのは当たり前だよ。そんなもつて俺の相棒となるデバイスは、やっぱり剣タイプなのがオーソドックスなのかな。それとは別に何かもう一種類あつてもいいけど、そつちは神様に任せるよ。センスいいの頼むぜー。あとバリアジャケツトつて言つたら見た目が」

そこまで言つて気になつた。



見た目？ そうだ、俺自身の容姿って大事じゃないか？

すぐさま部屋の中を見渡して、俺は鏡を探した。姿見らしきものは見当たらないが、机の引き出しとかには手鏡くらいあるだろう。やっぱりオリ主と言ったら中性的な顔立ちがデフォルトだろう。整った目鼻口は当たり前、髪はさらさらストレートで、ワンポイントとして目立つような色だと良い。鏡が無くても体は見る事が出来るが、俺が思う限りではとりあえず太っていない体型。しかし、実は超人的な力を秘めていたりするものだ。

「あの……実はですね。ちよつと言いだすけど」

「なんだよ、早く言ってくれ。もしくは能力をくれ」

「本当に申し訳ないんですけどお」

あつた、鏡。

俺は一度深呼吸をしてから鏡を覗き込んだ。

すると、そこには。

「ふ、普通だなあ。ちよつと普通過ぎるっていうか、もろに日本人だな」

「ま、まあここも、なのはの世界での日本ですから」

「ちよつと目え細くないか？ それに髪も黒だし………ってか何でメガネなんだよ？」

「メガネは外してもいいから、服着ませんか？」

あれ、何で俺って全裸なんだっけ？

その時だった。

「ちよつと、起きてるの？」

部屋の外で声がした。

誰の声だ？ 女の人？ しかし、この家には俺と神様以外に一体誰が？

「ひろしい？ 起きてるのかって訊いてるのよ？」

ひろしって誰だ？ いや、それよりも待て。

女の声が近づいてきているが、このままでは間違いなくこの部屋にたどり着くだろう。

誰なのかは分からずとも、俺の今の状況は人に見せられるものではない。だって全裸だぞ。赤の他人にこんな姿を見られたらまずいだろ。

ベッドに潜り込んで隠れるか。

しかし、そこで俺は立ち止まった。

「ちょ、ちよつとお！ どうしたんですかって、それより服！ 服！」

ベッドには神様がいるが、彼の容姿と言ったらよく見てみれば美少年。絵画に描かれる天使が抜け出てきたような、それこそ俺が憧れた中性的な顔立ちをしていて、しかも金髪碧眼。日本人離れしている。

そんな少年と共に裸でベッドインとか、そっちの方が変態的じゃないか。むしろ犯罪的だ。

「まずい！ どうすればいい!？」

「え！ だから服着れば良かったのに！」

「さつきから何騒いでるのよ、まったく！ 開けるわよ!？」

そしてドアが開かれた瞬間、俺の視界には中年の女性が映っていた。

時間にして約コンマ数秒と言ったところ。しかし、女性の硬直した姿がやたらと長く目に映っていたのは気のせいだろうか。俺の出来上がったばかりの心臓は、早くも止まりそうになっていた。

俺の全裸を見た彼女は短く悲鳴を上げた後、慌ててドアを閉めながら、「そういうのは一人の時にしなさいよっ!」と言って立ち去っていった。

全身に鳥肌が立ち、股間もきゅーっと縮まった。

それを見て一言。

「ちつちや……………」

そして俺は続けた。

「神様、これは一体」

「ぼ、僕はあなたにしか見えませんから、大丈夫です」

「あつそ……………じゃあ、あの人は？」

「お母さん、ですね。この世界における、あなたの」

「じゃあ、今夜は出会ったばかりのマイファミリーで家族会議かな。俺はパンツを探し出し、そつと穿いた。」

「どうしてそういうことは早く言ってくれないんだよ！」

「僕は言おうとしたんですよ？ で、でもひろしさんが」

「ひろしって呼ぶな！ 俺はもつとイカした名前がいいんだよ！」

部屋に掛けられていた学ランに着替え、俺は神様と一緒に家を出ていた。

家を出たと言っても、家出をしてきたという意味ではない。気まずい空気のままではあったが、母さんの用意した朝食をおいしく食べて、俺は学校に向かうため家を出たのだ。

俺以外の人には姿が見えないという神様を引き連れて、俺は晴れ空の下をイライラしながら歩いていく。

「俺を転生させるんだったら、もっと気の利いた境遇にしてくれなくちゃ駄目だろ！？」

激しい口調で責め立てると、神様は目を潤ませて鼻頭を赤くしながらも反論してきた。

「だ、だって！ 僕だっているいろいろ考えたんですよ！ ご飯の心配も要らない、社会人みたいに忙しさに時間を取られることもない、ただど親の躰や拘束にもそれほど縛られない、人生の中でも最も自由ではないかと思われる時期にあなたを転生させたいんです！ そう、十五歳に！」

「十五歳って言ったら受験生じゃねえかよ！ めちゃくちゃ忙しいよ！ 原作介入どころじゃねえよ！」

本当に気の利かない神様で困る。

俺が望んだ転生オリ主ってのは、両親は既にいなか離れて暮ら

しているかで、身を寄せる場所や安息の無い悲しい宿命を背負った男だ。しかも過去に、決して人には言えない秘密があったりして、それ故に全てを悟っていて、しかし、なのは達原作キャラと出会うことで大切な人を守るためという目標を見つけて。笑いかけたらポ、頭撫でたらポ。そんな素敵でダンディーでクールでギャグもやつちやってそんなでもって俺のために原作キャラがニコニコホロリで。

「あ、あの」

「何だよ！？ 今良いとこなんだよ！」

「僕、素敵だと思えますよ、ひろしって名前」

「フオローはいいんだよ！」

「確かご両親は、心の広い人に育ってほしいという想いを込めて」

「だからいいんだよ！ …………… それより、今って原作で言うところの辺なんだ？」

「何がです？」

「時代って言うか時期、時間って言うか…………… 要するに、原作はどこまで進んでるの？」

そこは肝心だ。とにかく、俺の身の回りに対する不満はこの際無視するとして、原作介入が出来るかどうかが大切なんだ。

俺が神様の答えを待っていると、彼は「えーっと」と言いながら視線を宙に泳がせた。

「確か、高町なのはは現在九歳で、私立聖祥大附属小学校の三年生です」

「じゃあ原作で言うと二期か二期ってわけだ。それにしてもなあ、なんで俺となのはを同級生にしないかなーこの神様は」

「予定では今日の夕方、なのはは塾に行く途中の公園でユーノと出会いますね」

「じゃあ一期か…………… って今日かよ！？」

なんだなんだ、この慌しさは。

転生オリ主の初原作介入っていうのは、タイミングが大事なんだよ。間が悪くてなのは達といつまでも出会えずに、気が付いたら放

送終了してましたじゃ意味ねーだろうが。

これから起きる事柄としては、シリーズ一期の第一話において要とも言える展開。なのはが初めてユーノに出会う場面。

何としてでも、ここに俺という存在をねじ込まなくてはならない。そして魔導師としての俺も初お披露目というわけだ。

「こうしちゃいられんな。さつさと公園に行つて張り込みだ」

「え、学校は行かないんですか？」

「アホか。おとなしく学校で受験勉強するオリ主なんて聞いたことねえよ。何事も早め早めが肝心だ。今のうちに公園と周辺地理を把握して、俺となのはの邂逅を絶妙のタイミングでクリアするんだ」

「でもひろしさん」

「ひろしってゆうーな。俺の名は……………そうだな、『さいじょういんせいば砕城院聖刃』  
とでも名乗っておこうか」

「……………いいんですか、それで」

何故か顔を引き攣らせている神様。圧倒されているって感じだな。しかし、そんなものに構っている暇も無い。とにかくリリカルなのは一期の世界にやって来た以上、この物語の舞台となる海鳴市についてよく知っておかなくてはいけない。まずは一番肝心な、なのはとユーノの出会いの場所だ。

幸いなことに、市内に点在する地域マップを見つけることが出来た。海鳴市はかなりでかい市ではあるが、俺の家から公園までは歩いていけない距離でもないことが判明。その点だけに関しては、神様を褒めてやってもいいなと思う。

走り続けること二分ほど、息が上がってしまった。

なんだこの体。チート能力で空とか飛べるといいのにな。ま、そういうた能力のお披露目も後にとっておくか。

時間もたつぷりあるし、歩いていこう。

ただ歩くだけというのも退屈なので、俺は神様に言った。

「なあ、何で俺を転生させるって時に、俺の家族までも用意する必要があつたんだよ？」

「またその話ですか………まあ、一言で言えば、原作内にごく自然な形であなたを転生させるため、平凡な設定を用意したからです」  
平凡な設定？ その言葉の意味が分からなくて、俺は首を傾げて神様の方に顔を向けた。

すると、神様は俺の顔を見て理解したのか、真顔で言ってきた。

「要するに、あなたには原作に影響が出ない程度の人物として、この世界に入り込んでいただきました」

「それっておかしくないか？ 俺、原作介入目指しちゃってるんだけど。神様の言い分だと、俺は原作に影響を与えちゃいけないみたいじゃん」

「スムーズなスタートを切るためですよ。あなたが原作介入をするにしても、出だしからぶっ飛んだ介入をしてしまうと、もはやそれは原作介入ではなく、オリジナルになってしまうからです。なるべく原作に沿った展開で、でも、あなたには介入していただく、と」

「なんかピンと来ないなあ。最初っから設定改変済みで始まるSSだってあるくらいだぞ？ 何でそんなに気を遣うんだよ？」

そこまで言うと、神様の顔が更に真剣さを増していることに気が付いた。その気迫に押された俺は、思わず歩みを止めてしまう。

そんな状態の俺を待っていたかのように、神様は更に一步、俺に近づいて言った。

「あなたにお願いがあるんです」

「な、何？」

「救ってほしいんです」

「は？」

「救ってほしいんです。この作品に待ち構えている、悲しい展開をあなたの手で助けてほしいんです」

それは、俺にそうしろと頼んでいるのか？

無論、原作介入をするからには、俺はなのはの物語を公式とは違う方向に持っていくつもりだ。

原作介入だぞ？ しかも俺が主人公。自分の望む展開にならない

でどうする。

そんなことを改めて言われても、俺は頷くさ。

いや、違う。頷くことしかできなかった。

そうすることしか出来なかったのは、神様の言うことが当たり前過ぎて言葉が出なかったからじゃない。

怖かった。神様の切羽詰まった顔が、俺に有無を言わせないくらい、余計な言葉を発すると言わんばかりの、それほどまでの気迫に満ちていたからだ。

一体なんだと言うのだろうか。神様の望みを俺が叶えるということが、俺の目的みたいに言われている。

これではまるで、神様のために俺が転生させられたみたいじゃないか。

いや、本当にそうだろうか。

俺は湧き起こる記憶の波を感じ取った。

そして思い出してきた。あの、真っ黒な世界で俺が抱いていた気持ち。

俺だって神様と同じで、悲しい結末を望んでなんかいない。

ハッピーエンドこそが至高。誰もが悲しまない終幕こそ、物語には相応しい。

お前の思い通りには、絶対させない。

お前？

「あ、ひろしさん。公園が見えてきました」

「ひろしじゃねーって。セイバと呼んでくれていいぞ」

辿り着いた公園は、緑が豊かで遊歩道があちこちに伸びている穏やかな場所だった。今はまだ陽が高い時間帯ということもあって、あちこちで見られる公園の利用者はお年寄りがほとんど。ストレッチをしたり、ベンチに腰掛けてお喋りをしていたり、公園内の池で釣りに興じる人もいる。

ふと思い出した。確かなのは達は、塾の帰りにこの公園の中で、近道をしようとしてユーノを見つけるんじゃないかってっけ。

更に、アニメの放送内容を振り返る限りでは、ユーノは既に小動物状態で横たわっているはず。

ならば、その場所をきつちりと正確に把握しておかないといけな

い。  
俺は遊歩道から外れて、草を掻き分けながら傷ついたユーノを探した。

そうすること一時間以上。腹が減ってきて力も出なくなっていた時、ようやく俺の目の前に、希望の光が見えてきた。

「おお、見つけたぞ！」

草に身を隠しながら、俺は小さな声で神様に告げた。

「あそこにフレットモードのユーノがいるぞ」

「本当だ。うわぁ、結構傷だらけなんですね」

神様の言う通り、そして原作の通り、ユーノは体の至るところが傷ついていた。見ているだけでもなかなか痛々しい。

「どうしましょう?」

「どうするも何も、場所も把握出来たし、今はとりあえず無視だよ」

「え! あのまま放っておくんですか!？」

神様がそんなことを言うので、俺は小さくため息をつきながら言い返した。

「スムーズなスタートで介入するって言ったのはあんただぞ? それに、ユーノだって男の子なんだし、どうせ夕方には助けが来るんだ。ちよつとぐらい我慢させといても大丈夫だ」

「なんかシビアっすねえ……………」

俺は神様と共に、そつとその場から離れた。

少し離れたところまで行き、低くしていた姿勢を起こすと、体のあちこちに付いた葉を払い落とす。

ユーノの倒れている位置は確認できた。あとは時が来るのを待つだけだ。

その時に俺は、『魔法少女リリカルなのは』の物語に介入する転生者としての人生をスタートさせるわけだ。



待っている。必ずや原作の悲しい結末を変えてみせる。

砕城院聖刃の名にかけて。

「ちよつと君い」

「え？」

突然声を掛けられて、視線をぐるりと変えると、そこには正義を守る日本のおまわりさんが立っていた。

「学生だろ、君。こんなところで何しているんだ？」

「あ、いや、俺は別に怪しくなんてないぞ」

「もうとっくに授業が始まっている時間だろう？ それなのにこん

なところで堂々とサボりかい？ 君、名前は？」

「さ、砕城院！ 砕城院聖刃だ！」

「……本当の名前は？」

「山田ひろしだよ！」

ちくしょう、本当に原作介入してやるんだから。

俺は、背後から注がれる神様の刺々しい視線を浴びながら、固く誓った。

See you next time .

## NEXT 2：魔法少女、変身

公園でおまわりさんに補導されてしまった俺は、家に帰り着くとすぐに母さんから呼び出しを受けた。

「どうやら、あのおまわりさんは俺の家にまで連絡を入れてしまったらしい。」

「ひろし！ ちょっとそこに座りなさい！」

「え、なんで？」

「なんでじゃないでしょう！？ あんた、学校サボって補導されるだなんて、何してんのよ!？」

普通に怒られている。

だがしかし、ちよつと待ってくれ。はっきり言うが、今の俺って、転生オリ主としてのあるべき姿なのだろうか。お母さんに怒られるオリ主なんて聞いたことがないぞ。

「母さん、あんたをそんな子に育てた覚えなんてないわよ!？」

「そりゃそうさ、俺は転生オリ主なんだから！ 俺だって育てられた覚えなんかはないよ！」

本当にもう、ちよつと待ってくれ。はっきり言うが、俺のように怒られているキャラってリリカルなのは世界観に合っていないだろ。つか浮いていないだろうか。

「今夜は父さんにも怒ってもらうからね！」

「おかしいだろう！ 何で転生オリ主なのにこんなに怒られなくちゃいけないんだよ！」

「さっきから言ってるテンセイナントカって何なのよ!？ だいたい、あんたが怒られるようなことするからいけないんでしょうが！」

「ずつりー！ 他所の転生オリ主はそんなに怒られてないのに！」

「あつそう！ じゃあ他所の子になつちゃえば!？」

「他所の子？ …………… そうか、それは俺が高町家に居候するフラグか」

なるほど、そういうことか。これは何とも、意外なところから原作介入のチャンスを得たものだ。

“ 棚から牡丹餅 ” とはまさにこのこと。これで俺は、“ 今日から高町 ” だ。

原作介入のチャンスを手にした俺は、思わず神様に向かって微笑んでいた。

しかし、神様は何も言わないままため息をついて俯いている。何故だ、俺の原作介入が嬉しくないみたいじゃないか。

まあ、何はともあれ、これで俺もオリ主らしくなれるというわけだ。

「怒られてるのに、何をニヤニヤしてるのよ!？」

「母さん、ありがとう! 今日から他所の子になる!」

「なっ……………」

俺は部屋に戻ると、クローゼットの奥にしまっていたポストンバッグを見つけ出して、荷造りを始めた。

さて、せっかくのチャンスが無駄には出来ないな。

肝心なのはどうやって高町家の一員になるきっかけを得るか、だ。まあ、これに関しては神様にも一緒に考えてもらおうとしよう。

俺の心はまるで遠足に行く子供のようにだった。荷造りがこんなにも楽しいとは驚きだ。

「待てよ……………高町家に行くんだったら、木刀とか必要かもな。士郎や恭也と戦うことになりかねんからな」

高町家の男共は戦闘民族だ。なのはの父である士郎と、兄の恭也は剣術御神流を操る強敵。転生オリ主である俺でさえ、少しばかり気合いを入れないといけない程度には手強いはず。

木刀って何処で買えるんだろう？

俺はバッグを肩に下げてから、玄關に向かっていった。

「ひろし、あんた」

「じゃあ母さん、元気でね」

顔を見たら別れが辛くなるかも知れない。特に母さんが。

俺は精一杯の優しさを捧ぐつもりで、あえて後ろを振り返ることなく玄関を出た。

さようなら、俺の家。

「ひろしきーん」

公園の草むらの中、ユーノの様子が窺える位置に身を潜めていた俺は、横で話しかけてくる神様の方を向いた。

「だから、俺のことはセイバと呼べって」

「お母さんに謝ったほうがいいですよー」

「何言ってるんだ。これはチャンスなんだぞ？ それを手放す理由なんてないだろう」

もうすぐなのは達の通う小学校は下校時刻になるのではないか。

アニメの描写通り、公園にはだんだんと傾いた陽の、オレンジ色の光が掛かり始めていた。

事が起こる前に予習をしておこう。俺は、頭の中にある原作知識を掘り起こした。

なのはと、同級生のすずか、アリスの三人は、塾に向かうため近道としてこの公園を抜けようとする。そして、ユーノが発する念話をキャッチしたなのはは、傷ついたユーノを保護し、榎原動物病院に連れて行くのだ。

ここまでの流れの中で、俺が介入出来る隙を見つけられるかは分からない。しかし、たとえこの場ではそれほど大きな介入を果たせなかったとしても、チャンスはまだあるから大丈夫。

原作通りに行くならば、なのはは今夜、ユーノから魔法の力を授かることとなっているのだから。むしろ、俺が介入する上で最も重要な場面は今夜だと言っても過言ではない。

そうだ、俺が今までユーノに対して何もしなかったのは、なのはがユーノと出会って魔法少女になるきっかけを無くさないため。い

くら原作介入がしたいからと言って、なのはが魔法少女にならなければ、俺の求める展開にはならないからだ。

「ねえ、ひろしさんってばあ」

「くどいぞ、神様。もう少しでなのは達がやって来るはずだから、おとなしく待ってって」

その時だった。

「たぶん、こつちの方から！」

夕暮れ時の公園を走ってくる足音と共に、聞き覚えのある子供の声が届いてきた。

会ったことがあるわけではない。しかし、俺はこの声が誰なのかを知っている。

聞き間違はずなどない。俺は、この声の主が紡ぐ物語に介入するため、転生してきたのだから。

ついに来た。

ついに時がやって来たのだ。

「神様！」

「き、来ましたね！」

傷だらけのユーノに近づいていく、学生鞆を背負った女の子。

白いワンピースタイプの制服を揺らし、頭の上のツインテールを跳ねさせ、不安げな視線でユーノを見ながら走ってくる。

満身創痍のユーノが必死に送った救難信号を受け取ったから、彼女はここへやってきた。

そう、彼女の名は。

「あれが……“高町なのは”」

なのはは、ユーノを優しく抱きかかえた。

どうする。

どうする、俺。

何かするべきじゃないのか。

原作主人公が今、俺の目の前にいる。物語の始まりとも言える重要な場面に遭遇している。

ここで俺が何かして、原作に介入するべきじゃないのか。  
何をするべきなのだろうか。

「神様、俺は何をしたらいい？」

「ええ！　そういうの考えてなかったんですか！？」

「何て言って飛び出したらいいのかな！？　台詞が分からないぞ！」

「台詞なんて決められてるわけじゃないじゃないですか！？　あなたは原作キャラじゃないんだし！」

くそ、くそう！

このままでは俺の存在など無いかのように、物語が進んでしまう。  
一体どうしたらいい。

その頃、肝心のなのは達はと言うと、ユーノの容態を心配している  
らいろと意見を出し合っているようだ。

「あつ、見て……動物………怪我してるみたい」

「う、うん、どうしよう？」

「ど、どうしようって………とりあえず病院！？」

「獣医さんだよあー！」  
いよいよまずい。

このままでは、このままでは物語が進んでしまう。  
三人が焦っている時、俺は別の理由で焦っていた。  
刻々とタイムリミットが近づいてくる。

「この近くに獣医さんってあったっけ？」

「ああえつとお………この辺りだと確かあ………」

「待って！　家に電話してみる！」

ええい、ここでもたもたしていたら出遅れる！

俺は、意を決して草むらから飛び出した。

「ちょ、ちよつと待たんかあー！」

「えっ！」

「ひ、ひろしさん！　どうするんですか！？　どうするんですかあ  
！？」

ここで、何が何でも俺の存在をアピールしておかなくてはいけな

い。

俺が何故ここにいるのかを示さなくてはいけない。

気付け、高町なのは。今、この瞬間の俺とお前の出会いは、今後ののはシリーズにおいて紡がれる新たな物語の原点となるのだ。

俺は、転生オリス。

「ま、まき！ まきひゃ！」

「まき？」

「榎原動物病院つてのが………あ、あるんじゃないのかなあ？」

それだけ言うと、俺の頭は真っ白になっていた。

次に言うべき言葉が出てこない。何を言ったらいいのかも分からずに立ち尽くしている俺の膝は、面白いくらいに震えていた。

しばらく沈黙が続いた後、さすがが携帯電話を取り出しながら、なのはとアリサに言った。

「とにかく！ 榎原動物病院つてのがあるのかどうか、家に電話してみる！」

その言葉を合図にして、なのは達は電話を掛けながら走り去っていった。

三人がいなくなった後も、俺はしばらく動けなかった。

顔がやたらと熱い。緊張のせいもあるだろうが、今の自分を振り返ってみると凄く恥ずかしくなってしまったのだ。

何か出来たのか、俺。

名前は名乗れなかった。印象付けられるような強烈な台詞も吐けなかった。それどころか、緊張し過ぎてなのは達と全然目を合わせなかった。

何やってるんだ、俺。

「………すずか、結局電話してましたね。原作どおりに」

「うん、そうだね」

「どうしますか？」

「………そういや、この後確か、アイキャッチが入るんだっけ？」

「ひろしさんの出る幕じゃないですよ」

「あつそ……………」

今出来ることなんて、夜を待つこと以外に無い。

そうして俺と神様は、夜が訪れるのをひたすら待った。

一応周辺地域の地図を確認して、槇原動物病院が何処にあるのかは確認済みだ。この病院の場所が分からなければ意味がないのだから。

しかし、俺達が進められる段取りと言ったら、その程度しかない。町が夜闇に包まれるまで、それほど時間は掛からなかったはず。

だが、何もすることの無い、ただ時が流れるのを待つだけの俺達にとっては、あまりにも退屈な時間だった。

「今更家に帰るわけにもいかねえしなー」

「完璧に家出のノリで出てきちゃいましたからねー」

「腹減ったー。そういや今日は朝飯しか食べてないや」

「お小遣いも充分持つてるわけではないですからねー」

まあ、これも俺が物語の主要人物として原作介入するためだと思えば、まだ耐えられる。

リリカルなのはへの介入をするにあたって、最も物語に密接に関わることが出来るポジションは何処か。それを考えた時、俺は高町家への居候がベストだろうという結論に達した。

そうすれば、原作主人公であるなのはに四六時中張り付いてられるし、必然的に俺も魔法絡みの事件に関われるからだ。

だからというわけではないが、神様が俺をなのはの家族に、せめて同級生にでも転生させなかったことが悔やまれる。本当にこいつ、解つてないんだから。

「あ、ひろしさん。そろそろなのはが槇原動物病院に向かう頃ですよ」

「何！？ それじゃあ俺達も移動するか」



ようやく時が来たようだ。

今はおそらく、異世界の住人であるユーノが、魔法の石ジュエルシードの暴走体に襲われようとしているところ。そしてユーノの救難信号を受けたなのはが、榎原動物病院でユーノに魔法の力を授かり、暴走体と対決するという展開が待っているはず。

ここで介入しない手はない。しかも、転生オリ主である俺の反則<sup>チート</sup>能力をお披露目する絶好の機会でもあるわけだ。

何としても間に合わなくては。

空腹であることも忘れ、俺は精一杯走り続けた。

全ては原作介入のため。全ては物語を新たなる道へと誘うため。

そうだ、全ては“俺”という主人公のため。

繁華街を抜け、人通りもめっきりと減った住宅地にやって来た俺は、事前に確認しておいた地図を思い出しながら幾つもの曲がり角を抜けた。

相変わらず体力の無い体だ。既に息があがっている。

だが、目標はすぐ目の前。止まれるわけがない。

「ひろしさん！ もうすぐです！ あの角を曲がれば病院が見えますよ！」

返事をする余裕も無く、俺は前だけを見ていた。

その時、周囲の空気がいつの間にか変わっていることに気付いた。

先程から見ていたはずの光景。誰の姿も見えない、静かで暗い、住宅地。

そのはずなのに。

「何か……違う世界みたいだ」

「ジュエルシードの暴走体がいるんです。分かりますか？ なのはが戦う時にも、こんな風になったはずですよ」

そうだ。ジュエルシードの暴走体と戦う時、まるで町の中から人が消えてしまったみたいに、景色だけを残して他の気配が消え去っていた。“見慣れた未知の世界”が、そこに広がっていた。

「ってことは……」

次に起こる展開を予想していた時、すぐ近くの場所で爆発音にも似た轟音が鳴り響いた。

「ひろしさん！ 来ましたよ！」

神様の指差す方を見ると、砂煙が高々と舞い上がる建物の敷地から、小さな小動物を抱えた少女が飛び出してこちらに向かってきた。

高町なのはと、フレット状態のユーノだ。

「どうやら、魔法の力はまだ手にしていないらしい。」

「か、神様！ どうしたらいい!？」

「だからそういうのは考えといてくださいよ！」

駆けてくるなのは。どうやら彼女は暴走体から逃げることに必死のようで、前方にいる俺を見ているのかどうかも怪しいくらいに緊迫した表情を浮かべていた。

ええい、今はもたもた考えていられるか。

「き、君い！」

「あ、あなたは!？」

「何、何をそんなにあわわわてているのかね!？」

後ろで神様が「白々しい……」と呟いた。

「早く逃げてください！ 今、あっちから変なオバケみたいなのが！」

「オバケだって!？ そいつは大変だ！ ああ大変だ！ ところで、俺に出来ることはないですか!？」

今、俺ってすごく一生懸命に介入しようとしている。

あれだな、カツコイイ台詞って咄嗟には出てこないんだな。

「無いです！ 早く逃げて！」

「本当に無いですか!？ なんか、なんか無いですか!？」

今、俺ってすごく鬱陶しいんじゃないのかな。

思わずそんなことを考えてしまうほど、俺はテンパっていた。

「ああ、もうそんなこと言ってる場合じゃあ！」

その時、ふと、頭上に嫌な気配を感じ取った。

空が夜闇よりも黒い。アレは、雲なんかじゃない。

揺らめく輪郭を寄せ集めて、そいつは一つの巨躯を形成していった。

出た。ジュエルシードの暴走体。真っ黒な巨大マリモにも見える体の中ほどで、目を二つ真っ赤に光らせているそいつは、俺達を見つけたと思った瞬間、上空から急降下してきた。

「あぶね！」

すぐさま横に飛んで回避すると、暴走体が地面を揺らしながらコンクリートに身を沈めていた。爆風が俺の髪の毛を全て逆立たせるほどにぶつかってきて、思わず尻餅をつく。

怖い。こいつって確か、なのはが最初に倒す敵のはず。それがこんなにおっかない奴だったなんて。

なのは？

「そ、そうだ、なのはは！？」

見渡すと、電柱の影でユーノを抱えたままの彼女が、ユーノから小さくて赤い宝玉を差し出されているところだった。

それはまさしく、が望んだ展開。

高町なのはが、レイジングハートを受け取って魔法少女に変身する瞬間だ。

「神様！」

「何ですか！？」

「録画とか出来るか！？」

「無理！」

実に惜しい。魔法少女の変身シーンなんてそうそう見れるものでもないのに。

しかし、そんなやましいことを考えている場合ではない。

なのはがとうとう魔法少女に変身するのだから、俺ももういいだろう。

原作キャラの誰もが持ち得ない、唯一無二の絶対能力。全てを蹂躪する無敵の魔法。

転生オリ主、碎城院聖刃のチート能力。

それを解き放つ時が来た。

「ついに」

そう、ついに。

「ついにこの時が来たか」

それっぽいポーズをとってみた。たぶん要らないんだろうけれど、カッコイイだろうし。

ユーノに教えられるまま、変身の呪文を唱えるのは。そんな彼女の隣で、俺は同じ呪文を口にした。

我、使命を受けし者也

瞼を閉じ、心を澄まし、全身の血流を感じ取るように集中する。

契約のもと、その力を解き放て

祈れ。抱いた願いを叶えるために。

覚ませ。眠った力を呼び起こせ。

唱え。魂より囁く、魔法の言葉。

風は空に、星は天に

「ひろしさん！」

そして、不屈の心は……………この胸に！

見ている。

これが転生オリ主、碎城院聖刃の、魔法の力！

この手に魔法を！ セットアップ！

唱え終えたのと同時に、とてつもない力の波が俺の全身を打った。

「うおおおおおおおおっ！」

風ではない。熱とも違う。しかし、爽やかで温かい。

そんな力が、桜色の閃光となって俺の。

「お、俺の……………隣から！」

俺にはなんの変化も訪れていなかった。

桜色の魔力は柱となって、なのはの全身からほとばしっていた。

しかし、俺には何も起きていない。

もう一度言う。何も起きていない。

「か、神様！」

「説明しなくちゃと思っていたんですが！ ひろしさんには……  
…魔力がありません！」

「なん……だと………」  
なんか知らんが、ものすごく裏切られた気分だった。  
俺は一步も動けなくなっていて、その場で立ち尽くしてしまった。

「あぶない！ 逃げて！」

「……………へ？」

声に反応して振り向くと、そこには魔法陣のシールドを開いた魔導師姿のなのが、暴走体の攻撃から俺を助けてくれている姿があった。

これが、魔法の力。

すごく羨ましかった。

「ひろしさん！ ここはもう退きましよう！」

その言葉を聞いて、少しだけ我に帰ることが出来た。  
と言うより、湧き起こる怒りを思い出したみたいだ。

「ば……ばかやろう！ ここまできて退けるか！ 大体なんで俺に魔力がないんだよ！？」

「最初に説明しようとしたんですけど、すみません！ あの………  
…すみません！」

「なに謝ってるんだよお！ くそおっ！」

「でも！ 一応原作とは違う展開になってるでしょ！？」

「だからってこれじゃあ、エンドロールで『襲われる少年』くらいにしか名前付かねえよ！」

これじゃあ俺があまりにも哀れだ。

ふざけるな。こんなんで原作介入とか、情けなくて仕方が無い。

ジュエルシードの封印呪文だってちゃんと考えていたのに。

ちくしょう。

そんなことを考えていると、俺の苦悩なんか気付くことも無く、  
なのはとユーノが物語を進めていた。

「心を澄ませて。心の中に、あなたの呪文が浮かぶはずですよ」  
ユーノがそう言っているのを聞いた。

その台詞が出てきたことは、まさにこれからなのはが、暴走するジュエルシードを封印しようとしているところじゃないか。

俺の、俺の役目だと思っていたのに！

「くそっ！」

「ひろしさん！ まだチャンスはありますから！ 退きましよう！」

「駄目だ！ せめて……せめて呪文を唱えるだけでも一緒に！」

俺となのはの方向に、暴走体が突っ込んできた。

そして、なのはが魔法の杖、レイジングハートを構える。

封印魔法、発動の合図。

よし、行くぞ。俺の考えたワードを付け足して、一緒に封印しよう！

「リリカル……マジカル………」

「ポテンシャルウー！」

次の瞬間、レイジングハートから放たれた光が暴走体を捕らえると、暴走体は苦しそうな呻き声を上げながら徐々にその体を消滅させていった。

この後、高町なのはは転がるジュエルシードを回収し、ユーノと共に家に戻っていくはず。

しかし、俺は何故だか、これ以上彼女の側にいるのが辛くなった。だから、なのはが初めての封印をこなしている最中に走り出した。

疲れも忘れたまま随分と走ってきた時、後ろから神様が言った。

「あの………リリカル、マジカル、ポテンシャルって」

「うるせえ！ 俺だって……俺だって魔法が使いたかったんだから

！ 別に呪文くらい一緒にいいだろうがよ！」

酷く凹んだ夜だ。魔法は使えないし。高町家に居候という計画ど

ころか、原作介入すらまともに来なかったし。それに、お腹が空いた。

「俺だって、俺だって魔法が使いたかったんだもん」

「……………おうち、帰りましようか？」

「……………うん」

その後、俺は父さんと母さんの待つ家に帰り、こっぴどく叱られた。

でもその後で出された晩御飯の温かさに、「転生先の家族もいいもんだ」としみじみ思ったりした。

S e e   y o u   n e x t   t i m e .

### NEXT3：僕らは皆、生きている

『魔法少女リリカルなのは』は、平凡な小学三年生だった少女から始まる物語だ。

きつかけは、異世界の住人であるユーノ・スクライアが地球にやって来たこと。彼は、自身で発掘した古代遺物<sup>ロストロキア</sup>である、“ジュエルシード”という名の願いを叶える石がこの世界に飛散してしまったことに責任を感じて、石の回収をしに来た。

そして、回収作業中に危機的状况に見舞われた彼を助けたのが、物語の主人公である高町なのは。

ユーノは彼女に魔法の力を授け、なのはが魔法少女に変身することで危機は去る。

そしてなのはもまた、ユーノのジュエルシード集めを手伝っていくことにした。

物語が大きく動きを見せるのは、ジュエルシード集めが中盤に差し掛かったころ。ジュエルシードを集めているのが、なのは達だけではないことが判明するのだ。

そう、なのはとユーノに対抗する魔法少女、フェイト・テストアツサの登場である。

フェイトは、ジュエルシードを必要とする母の命令に従って、この世界にやって来た。

そして衝突を繰り返すなのはとフェイトの間に、時空管理局という組織までもが介入してくる。

時空管理局は、幾つも存在する次元世界を文字通り管理しているという巨大組織。ちなみに地球も、そんな次元世界の一つ。

ジュエルシードによって引き起こされる、次元世界の危機を止めたいと言う管理局。

狂気に塗れてしまった母のため、傷つきながらもジュエルシードを集めるフェイト。



ユーノのため、自分のため、平穩のため。そして、瞳に悲しい光を宿したフェイトのために奮闘するなのは。

これは、彼女達の成長と絆と勇気の物語なのだ。

「……………以上が、『魔法少女リリカルなのは』という物語のあらすじだ」

語り終えた俺は腕を組み、ゆっくりと目を閉じて余韻に浸っていた。あらすじを話してから改めて思ったが、これ、やっぱり介入したいなあ。

そんな俺の前には、黒い学ランに身を包んだ同年代の男二人が、俺と向かい合ったままじつと耳を傾けていた。

「で？ そのリリカルなんとかってのに、お前が関わってるわけ？」

「その通り！俺はこの物語に介入し、本来は歩むことの無かった道へ物語を誘う<sup>しざな</sup>ためにやって来た転生オリス、碎城院聖刃なのだ」

一つの机を囲み、俺達はそれぞれの給食を箸でつまんだ。

なのはとのファーストコンタクトが散々な結果に終わってしまった昨日。色々と考えてみた結果、少し落ち着いてみようということになったのだ。とりあえず、介入行動を起こす時以外はおとなしく日常生活を営んでいくことを決めた。

まあ、家出の件で両親にコテンパンに、ボロクソに、メッタメタに怒られたのが堪えた、というのも理由の一つだが。

そういうわけで、俺は学校にやって来ていた。

校門を潜ったときは、見覚えの無い奴等から挨拶をされて少し困惑した。俺自身には転生してからの意識しかないが、この体にはリリカルなのはの世界に組み込まれるための、十五年間の人生設定があるから仕方が無い。

正直な話、一時限目から四時限目までの授業はやったことがあるようなないような、中学生ってこんな難しいことやってたっけ？と、首を傾げなくなる内容だった。

それにしても昼飯が給食かよ。なのは達は屋上でお弁当とか優雅

な学校生活を送っているのに。俺のいる中学って公立なんだな。何  
度も思うが、俺はなのは達と同じ学校の同級生にしてほしかったん  
だよなあ。

教室の片隅に佇んでいる神様を睨んでみた。すると彼は、慌てた  
様子で視線を逸らして口笛を吹き出す。

「サイジョウインセイバって、お前の名前？」

「そつだ。これからはそう呼んでくれ、絶対にな！」

「あれか？ 難しい苗字とか書けない名前に憧れてるみたいなもの  
か？ まあ気持ちは分かるけどな」

そつ言ったのは、友人の小島だ。こいつも普通の名前だよな。

「あー俺もちよつと憧れるなー」

と、同意したのは淀橋だ。こいつはちよつと珍しいな。

「違つつーの。憧れとかじゃなくて、本来はそういうもんなんだ  
よ。頼むぞ、ちゃんと俺のことはセイバって呼んでくれよ？」

転生オリ主って言ったら、やっぱりかっこよくてインパクトある  
名前つてのが定番なんだよ。

神様が、俺を在り来たりな少年として転生させてしまった以上は  
仕方が無い。呼ばれたい名前、辛い過去設定、チート能力の有無。  
そついった俺の叶わなかった願望は、もう後付け設定としてこれか  
ら徐々に修正していくしかない。

名前はこれから呼ばせればいいし、過去設定は捏造出来るし、チ  
ート能力に関しては少しだけ考えがある。

勝負はこれからだ。俺は、自分の理想を自分の力で作り上げてい  
くことにした。

そつだ、諦めてたまるか。

昨日のことで懲りるわけなどない。こうなったら、何が何でも原  
作介入を果たしてやる。

「……………でも参つたよなあ。転生オリ主ともあろう俺の敵が、ま  
さか原作とは」

「あ、ところで山田さあ」

「その名前で呼ぶなっつーの!」  
先はまだまだ長そうだ。

学校の授業が終わると、俺はすぐに教室を出た。俺という人物は、幸いなことに部活動はしていないし、仮にしていたとしても受験生であるから引退が近かっただろう。

ということ、気兼ねなく海鳴市散策が出来るわけだ。

「神様、俺が今どこに向かっているか、分かるか？」

「えーっと、神社ですかね？ ほら、原作でジュエルシードに取り込まれた子犬となのはが戦うでしょう？」

「ピンポーン。今日こそは、なのはに俺の存在を認識させる」

「どうやるんですか？」

計画としてはこうだ。

まず原作を振り返ってみると、子犬と飼い主のお姉さんが神社に散歩に来た際、暴走したジュエルシードが子犬を取り込んだらしい描写であった。

それが分かっているならば話は簡単。

俺が先回りして、子犬が取り込まれる前にジュエルシードを回収してしまえばいいんだ。

そして、神社にはなのはとユーノがやって来る。当然ジュエルシードを手にした俺と対面。

あなたは、誰？ その手にあるものは？

君の探し物はこの石だろう。危ないところだったよ。もう少しで暴走しそうだった。

ジュエルシードを知ってるの？ あなたは一体……。

俺の名前か……… 碎城院聖刃だ。ニッコリ。  
惚れました。

「っっておっしやああああっ！ これで決まったああああああっ！」

「大丈夫なんですか！？ 本当にそれで上手くいくんですか！？」  
そうと決まればさっそく神社へ向かおう。

今頃、学校から帰ったなのは、ユーノと手分けしながら町中を走り回ってジュエルシード探しをしているはず。

そして気が付くはず。神社にあるジュエルシードを察知して、駆けつけてくるんだ。

先回りをするのは簡単だ。何故なら、俺は転生オリ主だから。

原作キャラであるなのは達と、転生者である俺との明確な違いは何か。

それは原作知識の有無。この先何が起こるのかを把握している俺は、未来が見えているのも同然のような存在。

そう、俺の持っているこの原作知識こそが、俺のチート能力と言える。

もう仕方が無いから、そういうことにしておこう。

あとは舞台となるこの町を、如何にして効率よく立ち回るかだけの問題。

大丈夫、今度こそ上手くいく。

「よし、神様！ 神社へ向かうぞ！」

俺と神様は、神社へ向かおうと駆け出した。

しかし、十数メートルも進まないうちに俺は、自分の視界に映ったものに注意を奪われて、足を止めてしまった。

「ん？ ひろしさん、どうしました？」

「なんでだ？」

「はい？」

見てしまったのだ。俺の目は、決して見過ごせないものを見た。まった。

しかし、何でこんなところで？

町の中を行き交う人ごみの中だったから、一瞬、見間違いかとも思った。何故なら、その人物の特徴的な部分が隠されていたから。

しかし、その考えもすぐに拭い去った。

“あいつら”だ。俺の直感が、頭の中にある遠くの記憶が、そう言っている。

一般人と同じ服装を身に纏い、帽子を深く被って頭を隠してはいけるけれど、間違いない。

俺は体の向きを変えて再び走りだした。後ろには、慌てた様子で追いかけてくる神様の姿。

向こうは気が付いていないのか、こちらを振り向くことも無く歩き続けていたので、すぐに追いつけた。

突発的に駆け出してきた勢いのまま、俺は二人の目の前に立ち塞がった。

「待て！」

「……………あんたは？」

目の前にいるのは二人の少女。小さな鼻も、瞳の色も、二人の幼い表情は瓜二つ。互いの体で違ふところと言えば、髪の毛の長さぐらいなもの。

「リーゼアリアと、リーゼロットだな？」

俺の言葉を聞いた二人の表情には、隠し切れない動揺が窺えた。やっぱり、間違いない。

この二人は、原作アニメ第二期『魔法少女リリカルなのはA's』に登場する、ギル・グレアム提督の使い魔であるリーゼ姉妹だ。

深く被った帽子の下には猫耳を隠しているはず。その帽子を取って確認してみるべきだろうか。

考えを巡らせていると、ロングヘアーの少女、リーゼアリアが言った。

「誰かと間違えているんじゃないか？ 私達はそのような名前ではないのだが」

「とぼけるな。だったらその帽子を取ってみる」

こいつらは原作二期に登場するキャラクター達。時空管理局員でありながら、二期で起こる事件の原因を作ったギル・グレアムの共謀者。

なぜこのタイミングで二人に出会うことになったんだ？

とにかく、ここで見過ごすわけにはいかない。

神様が言っていた。悲しい展開を救ってほしいと。ならば、こいつらの謀を食い止めるのも、俺の役目ではないのか。

「初対面で人違いの上に、いきなり帽子を取れとは失礼な奴だなあ。何者だ？」

「俺は、碎城院聖刃だ」

今度はショートヘアのリーゼロッテが言う。目付きは、素体となつた猫のごとく鋭い。

「悪いが、私達は陽射しが苦手なんだ。帽子は取れない」

「だつたら尻尾を出してみせてもいいぞ。その服の下に隠しているんだらう？」

俺は二人の穿いているミニスカートを指差した。

ミニスカートを。

その生足覗かせるミニスカートを。

「ん？ この下のか？」

「はあ、こんな白昼の中で、私達にスカートを脱げと言うのか？」

リーゼ姉妹の生足ミニスカート。

良い。実際に目の前にしてみてもすごく良い。

それを脱ぐ、だと？

「ひろしさん！ 気を確かに！」

脱ぐのか！？ そんなことをしたら人の目というものが！

しかし、ここでこいつ等を見逃すわけにはいかない。

そのためにも、こいつ等がリーゼ姉妹である確かな証拠を掴まなくてはいけない。

どうしたらいい。どうしたらいいんだ。

「それとも」

ロッテが意地悪く微笑んだ。

その笑みには明らか悪意が込められていた。こいつらは使い魔だ。元が動物なだけあって、野生的な面は人間よりも色濃いのだろ

う。それはそれで納得のいく話。

そんな彼女が俺に向けた視線は、まさに狩る者の目。本当ならば恐怖するべき目。

それなのに。

俺は何かを期待していた。

彼女の「それとも」という言葉の先にある、もしかしたら情欲を駆り立てるかも知れない選択肢に、大きな期待を寄せていた。

来い。その先は何だ。

来い。早く教えてくれ。

来い。俺に何をさせるつもりだ。

「お前が直接確かめてみるか？」

き、来た！ そういつのを待っていた！

「何だったら、お前が自分の手で脱がして確かめてもいいんだぞ？」  
そうだろう！

転生オリエント主なんだし、ハーレムとかセクシーハプニングとか。

エ、エロ展開とかあってもいいだろう！

主に原作キャラとの絡みで！

「ひろしさん！ 駄目ですよ！」

「黙れ神様！ ここでこいつらを逃がすわけにはいかないんだ！」

「でも！ 絶対に罠ですよ！」

「確かに罠かも知れない！ しかし男って生き物には、罠だと解つていても、あえてその中に飛び込んでいかなきゃならない場面つてのがあるんだ！」

「こ、今回は明らかにそんな場面じゃない！」

「さつきからお前、誰と喋ってるんだ？ 神様とか何とか、危ない奴だなあ」

神様が何と言おうと、俺は罠に飛び込んでいく。

いいいぜ、覚悟は出来ている。

やってやる。

俺は、転生オリエント主。

そして俺は。

「俺は……男だあ！」

爪先で地面を蹴り、リーゼロッテの方に向かってジャンプした俺は、両腕を思いっきり伸ばして彼女の腰に手をやった。

その瞬間。

「きゃあああああああつ！」

「え？」

「この人が！ この人が突然私のお尻をー！」

「えええええ！？」

ロッテが、彼女らしくも無い声を出して悲鳴を響かせると、周辺にいた人々が俺の方を向いた。

ひよつとして俺の現状って、非常にアレなのでは？

「その、砕城院聖刃という男が私のお尻をー！」

こいつ、名前までわざわざ叫びやがって！

「神様！ 一旦退くぞ！」

俺は一目散に駆け出すと、リーゼ姉妹を振り返ることもしないまま、すぐに別の路地へと入って逃げた。

たいした距離も走っていないのに、汗が噴き出てくる。顔がやたらと熱くて、心臓が爆発しそうなくらいに大きく脈打っていた。

「やはり畏だったか！」

「目に見えてたじゃないですか！ ……………それにしても、このままりーゼ姉妹は放っておくんですか？」

神様が不安そうに尋ねてきた。俺同様に原作知識のある彼も、やはり二人のことは気がかりみたいだ。

「ああ。とりあえず原作一期には、奴等が介入する余地は無い。ただ当分の間は放っておいて大丈夫だろう」

「そんなに言い切るなら、最初っから手え出さなきゃ良かったのに！」

「お尻、柔らかかったなあ」

今日は手を洗うのを止めよう。



俺と神様は、進路を神社に変えたまま、ひたすらに走り続けた。

神社に辿り着いた俺と神様。

俺は肩を大きく上下させて息を切らしながら、石段を上りきって周囲を見渡した。

お姉さんと子犬は、まだやって来ていないようだ。その代わり、随分とあっけなく見つけてしまった。

「ひろしさん、ほら。ジュエルシードです」

鳥居の脇に、草木に隠れるようにして転がっているのは、蒼い光を放つ魔法の石だった。

「こんなところに落ちてたんじゃあ、子犬も拾っちゃうよなあ」  
などと言いつつ、俺はジュエルシードを拾い上げた。

まあ、何はともあれ目的は達成した。子犬を取り込んで暴走するよりも早く、俺が回収出来たのだ。あとはなのはとユーノが、このジュエルシードを察知して神社にやって来るのを待つだけ。

そうすれば、俺はジュエルシードを手にした謎の少年として、堂々と原作介入が出来るというもの。

途中、トラブルに見舞われることもあったが、何だか今日は順調じゃないか。

神様の方を向くと、彼も小さく頷きながら「やりましたね！」と言っている。

「やっと原作介入が出来るぜ。まあ、後は俺の辛い過去を考えとかないとな」

「そんなに辛い過去設定は必要ですか？ 別に無いなら無いでも」  
「アホか。主人公と言ったら辛い過去は王道だろう。まあ、なのは達が来るまでの間で適当に考えとくさ」

そう言っただ俺は、ジュエルシードを覗き込んだ。

早くなのはとユーノ、来ないかなあ。

ん？

「あれ、神様？」

「はい？」

「このジュエルシード、暴走しないとなのは達には察知されないんじゃないね？」

「あ」

冷たい風が、俺達の足元を吹き抜けていった。

そうだよ。原作では、なのはとユーノはジュエルシードの暴走を察知して駆けつけるんだよ。

ジュエルシードがおとなしくしていたら、ここに来るわけないじゃん。

まずいな。だからと言って故意に暴走させるのは何だか気が退ける。

「参ったなあ。なあ神様、どうしたらいいんだ？」

俺はそう言いながら、石段に腰掛けた。

「そんな、僕だってどうしたらいいのかなんて……………」  
すると、石段を誰かが上ってきた。

それはスパッツとジャージ姿の女性。頭にはヘアバンドをつけていて、ランニングシューズを履いたその姿には、見覚えがあった。

確か、原作で子犬を連れて散歩していたお姉さん。

「神様をお願いごとをしているのかな？ 受験生みたいだね」

「えっと……………」

「どうしたらいいんだって、声が聞こえてきたからさ」

原作では台詞が無いキャラクターだったから印象も薄かったけれど、声を聞いてみると大人っぽい人だなと思った。

ってか綺麗だな、おい。

ちらりと神様を見ると、彼もどう対処したらいいのかわからずにおどおどしていた。

まあ、ジュエルシードは既に俺が持っているし、なのは達がここに来ないのなら、後日会えばいいだけだ。ここは普通に接しておく

べきだろうな。

「ま、まあ、受験前の神頼みってやつですよ」

「そっか。頑張ってるね」

そう言えばさつき、リーゼ姉妹に会った時もあったけれど、改めて俺は転生してきたんだということを思い知った。

テレビアニメで放映されていた部分ってのは、視聴者からすれば確かにその作品の世界そのものなだけけれど、こうしてアニメの世界に入ってみると、画面には映らない奥深さを感じ取ることになる。テレビ画面に放映されていないところでも、やっぱりこの世界には生きる人達がいて、生活をしていて、営みがあるんだ。

だからこのお姉さんだって、放送時には台詞なんてなかったのにこうして俺に話し掛けてくるし、リーゼ姉妹も原作一期の時から存在しているんだ。

映っていないからと言って、無いわけではない。

考えてみたら当たり前のことなのかも知れないけれど、それに気が付くことが出来て、何だか物語の深さを垣間見た気がした。

「でも、神様にお願いし終えたら、早くおうちに帰って勉強したほうがいいんじゃない？」

「え、ええ。そうですね」

もうちょっと、この人と話をしていたいな。

下心とかじゃなくて、俺がこの世界にやって来たという事実を噛み締めたいと思った。

「よ、よければお姉さんのお名前が知りたいです」

「あら、なあに？ ナンパ？」

お姉さんが笑っていた。

「そういう時は、自分から名乗ってくれろと嬉しいかな？」

「あ、すみません。俺は碎城院せい」

その時、石段の下を通りかかったパトカーが、拡声器で何かを報じているのが聞こえてきた。

『この付近で痴漢被害が発生しております。サイジヨウインセイバ

と言う名前にお心当たりのある方は、ご連絡をお願いいたします。』

おのれリーゼ姉妹。俺の名前を明かしやがって。

「俺、山田ひろしって言います!」

神様が呆然として口を開け放した。

「良い名前ね」

そんな神様を無視して俺とお姉さんが一緒に笑っていると、突然、足元から大きな鳴き声が聞こえて驚いた。

お姉さんの子犬が吼えたみたいだ。近くで見ると、もこもこしていて可愛らしい。

俺は身を屈めて撫でていると、子犬は尻尾を振って手を舐めてきた。

本当に可愛いな。こいつがジュエルシードに取り込まれると、あんな凶暴な姿になるのか。

俺は原作を思いながら、手の平を差し出した。

「よーしよしよし。お手、お手をしてごらん?」

そう言うのと、子犬は右足を持ち上げて俺の手の平に乗せた。

よしよし、賢い賢い。

ん?

「ひ、ひろしさん!」

俺が差し出した手の平には、さっき拾ったジュエルシードが乗ったままだった。

ひよっとすると、これは非常にアレなのでは?

子犬の体はジュエルシードと共に光を放ち始めた。

「あ、あれ?」

そして次の瞬間、体を真っ黒に染め上げて子牛ほどの大きさにまでなった子犬が目の前に現れた。ってか子犬じゃねえ。背中や頭から生える角のような突起は禍々しく、四つの眼は俺とお姉さんを見睨み、胴より長い尾が石畳を度々打つ。

「きゃあああつ!」

お姉さんが、原作通りに子犬の変わり果てた姿を見て気絶してし

まった。

「ひろしさん！ 逃げましょう！」

「しかし、お姉さんが！」

「原作通りになのはが来るんだから、大丈夫ですよ！」

「そうだ。原作では、なのはがやって来てこの犬の暴走を止めて、お姉さんと子犬は夢を見ていたとでも思ってた無事帰る。」

「だが、だからと言ってここで、俺だけ逃げるのか？」

「さっき思い知ったじゃないか。」

「この世界にだって、テレビアニメでは分からない奥行きがあることを。」

「この世界にも人々が生きていることを。」

「この世界だって間違いなく営みがあることを。」

「そんな中において、この場面で何もせずに逃げるのか？」

「ちよ」

「そうだ。」

「ちよつとそれは出来ないだろ！」

「ひろしさん!？」

「俺はお姉さんを庇うようにして、犬の前に立ち塞がった。」

「何が出来る？ 今の俺に何が出来る？」

「魔力も無い。体力も無い。」

「そんな俺に、何が出来る？」

「頭をフル回転させていると、突然目の前に何かが迫ってきているのが見えた。」

「なんだ、これ？」

「鞭？ 違う、犬の尻尾だ。」

「それが？」

「何？」

「次の瞬間、視界が真っ暗になって、意識も遠のいていった。」

「神様が名前を叫ぶ声は聞いた気がするけれど、正直そんなことはどうでもいい。余裕がなかった。」

とりあえず、メガネが壊れたなあ、ということだけは分かった。

そして、気が付くと俺は夕暮れの神社の石畳に寝転がったまま、誰かに肩を揺すられていた。

「ひろし君、起きて」

「はれ？」

体を起き上がらせると、顔面がひりひりと痛むことに気が付いた。

「顔、大丈夫？」

「ええ、まあ」

俺、どうなっただっけ？

「何だか、二人してここで寝ちゃってたみたい。転んだのかな？」

「寝てた？ 転んだ？」

「不思議だね。君が神様に無茶なお願いでもしたんでしょう？ バチがあたっただんじゃない？」

そう言うと、お姉さんが笑いながら立ち上がった。

「すっかり陽が暮れちゃったし、もう帰りましょう」

「は、はい」

手を貸してもらい、俺は立ち上がった。

足元にはあの子犬が、何食わぬ顔で擦り寄ってきていた。

もう一度周囲を見渡して、神様の方に視線を向ける。

すると、彼は俺の姿を見てから安心したように微笑んで、そつと言った。

「原作どおり、なのはとユーノが来て、ジュエルシードを回収していきました」

「……………つてことは、また介入失敗か」

「何か言った？」

お姉さんに尋ねられたので、俺は慌てて首を横に振った。

まあ、今回は悔しいという気持ちよりも、ほっとした気持ちが

きかった。

何故なら、奥行きがあることを知った世界の中で、そこで知り合ったお姉さんが無事でいてくれたのだから。

原作どおりなら、助かることは解っていたはずだ。

でも、そういう視聴者からの視点じゃなくて、同じ世界にいる者としての視点から湧き起こる感情が、俺の悔しさを少し癒してくれるみたいだ。

仕方ない。原作介入はまた次回だな。

俺はお姉さんと並んで、石段を降りていった。

See you next time .

## NEXT 4：早過ぎる登場

ベッドに体を横たえて、俺は天井をじっと見つめていた。

日光を遮るカーテンの隙間から光が漏れ、薄暗い中に真っ直ぐな閃が描かれている俺の部屋。外から微かに伝わる雑音以外、耳に届くものは無い。

静寂に満たされた空間の中、俺はそっと自分の右腕を天井に向けて伸ばし、手の平を翳してみる。

目の前にあるのは俺自身の腕。それは間違いなく自分の一部であるはずなのに、何故か違うものに見えた。

おぞましくて、とても邪悪で、酷く冷たい手。

そんな自分の手に、力に、俺は問いかけた。

この手は一体何を掴むことが出来るのだろう。

この手は一体誰を救うことが出来るのだろう。

この手は一体。

「……………俺に、こんな能力があるだなんて」

自然と笑みがこぼれる。

それは明らかに自嘲の笑いだった。

苦しかった。憎悪に塗れた俺の思いとは裏腹に、この能力は大切

な“あいつ”を救う力となる。

捨て去りたいという願いと、守ってみせるといふ誓いが俺の中で激しくぶつかり合い、心を削る。

一体どうしたらいいのか。そんなことを考えることも苦痛。本当に苦しくて、痛くて。

今なら誰もいない。ここに居るのはたった一人。俺だけ。

そう思った瞬間、抑えきれなくなった感情が静かに溢れた。

雫は、きらきらと光る通り道を示しながら、そっと枕を濡らしたのだ。

今だけ、少しだけ、俺は安らげる。



「何で泣いているんですか？」

「……………練習」

部屋の片隅にひっそりと立っていた神様が質問してきたので、俺はぼつりと呟いた。

「練習って、なんの？」

「シリアスシーンの」

神様が大きいため息をついている。なんだその反応は。

俺は上半身を起き上がらせると、神様の方を向いて訊いた。

「どうだった？ 今のは結構ぐつときたる？」

「いや、その……………能力って言ってもひろしさんには」

「解ってるよ！ 俺に能力が無いってのはもう知ってるよ！ でも

一応さ！ いざって時に必要になるかも知れないじゃん！」

「何ですか、そのいざって時というのは」

最初は部屋の中で原作介入の方法を考えていたのだが、途中、自分の背負う辛い過去設定を練りこむことに没頭し始めた。そうしたらだんだん雰囲気が出てきたので、孤独に耐えながら葛藤する自分というものを練習することにしたのだった。

それにしても今のは良い出来だったな。涙が出るくらいまで入り込めるなんて、俺って役者でもやっていけるんじゃないか？

しかし、だからと言って喜んでばかりもいられない。

こういった努力も俺がきちんと原作介入を果たさなければ、結局無駄な努力に終わってしまうのだ。いくら宿命に泣く孤高の戦士になりきれても、リリカルなのはの物語に関わらなければ没設定で終わってしまうのだから。

「やっぱり、なのは達に関わるためのきっかけが必要か」

「でも、どうやって関わるんですか？」

「そこだよなあ。一体どこに原作介入の余地があると言うのか。」

リリカルなのはの世界に転生して初日。なのはが初めて魔法少女になった時、魔力が無い俺は、なのはの姿に羨望の眼差しを向けることしか出来なかった。

翌日の神社だつてそうだ。なのはよりも先にジュエルシードを見つけておいたにも関わらず、ちょっとした手違いから展開はやはり原作どおりに。あれは大きなチャンスだったと思っていたので、非常に悔やまれる。

だが、実はその後も失敗の連続だった。なのは達がプールに行つた時も、夜の学校でひっそりで行われていたジュエルシードの封印劇も、結局俺は介入することが出来なかった。

極めつけは、海鳴市を襲った巨大樹木の回。原作の第三話に相当する話。ジュエルシードの暴走によって人の願いが形を成し、巨木となつて町を襲つた事件の時だ。なのはが自分の甘さと油断を悔いるという、物語としても一つの節目であつた回なのに。

そんな大事な時だと言うのに、俺は一切関わることが出来なかった。何故ならその日、連日の介入行動によって疲弊しきつていた俺は、うっかり居眠りをしてしまつていたのだ。

どうして起こさなかつたのかと神様に問いたとしても、「あれほど大きな被害が出てしまうようでは、ひろさんの身が危ない思つたから」と、言い訳をするばかり。

まつたく、こんなんじゃあ本当に、俺が介入するよりも先に物語が終わつちゃうよ。

「仕方ない、ちよつと町に出てみるか」

「出てどうするんですか？」

神様が不思議そうに訊いてきた。

俺はクローゼットから適当に私服を取り出して、着替えながら返事をした。

「リーゼ姉妹と会つたみたいにな、何か介入のきっかけを得ることが出来るかもしれないだろ？」

「……………またリーゼ姉妹に見つかったらどうするんですか？」

着替えの手を一瞬だけ止めて、俺は考えた。確かにまた痴漢扱いされてしまつては困るな。

「ま、まあ今度こそ気をつけるさ」

「大丈夫なんでしょうね？」

ものすごく疑わしいような視線を向ける神様。俺はその目に気が付かないフリをしながら、着替えを済ませた。

それでもまだ見てくるので、違う話題を振ることにした。

「そ、それにしてもあの時、リーゼ姉妹って何してたんだろうな？」  
そう言うと、神様はようやく視線を天井に逸らしてから言った。

「んー。たぶん、八神はやての様子を監視してたとかじゃないですか？」

「はやての？ だってはやての登場は二期からだぞ？」

八神はやてというのは、アニメ第二期『魔法少女リリカルなのはA's』から登場する主要登場人物だ。

『闇の書』と呼ばれるデバイスが巻き起こす事件において、最も重要なポジションにいる車椅子の少女。俺の会ったリーゼ姉妹やその主も、時空管理局と共に動くのは達も、新キャラクターとして登場する四人の守護騎士達も、全てははやてを中心として動くことになる。

そんな八神はやてだが、現在の一期には全くもって関わらない人物。それなのに、リーゼ姉妹がこんな早くから動くというのはおかしくないのだろうか。

「二期からの登場と言っても、彼女達が一期終了まで存在しないわけではないですから。たとえアニメの世界と言っても、ここにはこの時間が存在します。きっとリーゼ姉妹は、二期における自分達の役割のため、既に準備を進めていたってことでしょう」

「そうか。いくらアニメとは言え、こうしてこの世界が存在する以上は、テレビじゃ分らないところにもそれぞれの動きがあるってことか」

「そういうことです。こないだの神社の時にも思い知ったじゃないですか」

言われれば納得出来ない話ではないんだけどなあ。俺は腕を組みながら小さく唸り声を上げた。

まあ、そのうち慣れてくる感覚なのだろうか。

「ところで神様」

「はい？」

俺は気を取り直して、もう一つ訊いた。

「大事なことを確認しておきたいのだが」

「何でしょうか？」

「フェイトって、何時頃出るんだ？」

フェイト・テストロツサ。一期シリーズから登場する、リリカルなのはには欠かせないキャラクターの一人である。

なのはやユーノとは別に、ジュエルシードを集めるもう一人の魔法少女として登場する彼女は、実に悲しい運命を背負った美少女だ。自身の研究のためにジュエルシードを必要とするプレシア・テストロツサに命じられ、酷い仕打ちを受けながらも健気に頑張る彼女。リリカルなのは第一期は、ある意味でフェイトが主役とも言える物語である。

そう、フェイトは悲しい運命の元に生まれた少女だ。

それはつまり、俺が救うべき存在ではないか。神様にも言われた通り、悲しい運命を変えて救うのだとすれば、フェイトが思い浮かぶ。

そんなフェイトは、原作の第四話で初登場。なのはと敵対する立場で現れる。

俺が原作介入を果たすのであれば、必然的にフェイトとも関わることになる。だからなのはとフェイトが一緒にいる場面こそ、介入するにはもってこいの場面なのだ。

「えっとあ、確かなのはがすずかの家でお茶会をする回に登場だからあ……………」

神様の視線が宙を泳ぐ。

「いつだ？」

「あ」

「何だよ？」

「……………うつかりしました。今日です」

「今日って……………またそういうタイミングかよ！」

初めて介入行動を起こした時もそんなタイミングだったな。いきなり当日ってのは慌しいから止めてほしいものだ。

とにかく、今はつきりしているのは、もたもたしてられないということだ。

「ごめんなさい！」

「謝るのはいいから、すぐにすずかの家へ向かうぞ！」

俺は急いで自分の部屋を出た。

玄関へと駆け足で向かい、靴を履いて外に飛び出ると、後ろから神様が慌てて言ってきた。

「す、すずかの家に行くんですか!?!」

「そりゃあそうだろう! じゃなきゃフェイトに会えない!」

「だって、お茶会に呼ばれるどころか、すずかとの接点なんて何もないのにどうやって!?!」

「口実なんて何でもいいんだよ! 入っちゃえばこっちのもんだったの!」

「そ、そんな無茶苦茶な!」

何が無茶苦茶なものか。

俺は転生オリ主だぞ。主人公って言うのは、ぼーっと突っ立ってたって事件に巻き込まれるものだと相場が決まってるんだよ。

よーし、待っているよ。フェイトを救うのはこの俺だ。

熱い想いを胸に抱き、俺は勢いよく玄関を出ていった。

高町なのはの親友の一人、月村すずか。

彼女の実家は所謂超大金持ちであり、なのはの家が何個も入ってしまうような敷地の中に建てられた欧州風建築の家に住んでいる。

その家には月村家に仕えるメイドさんだっている。

まさに、絵に描いたようなお嬢様なのだ。

今日は、高町なのはとアリサ・バニングスがずかの家でお茶会を開いている日。

そして、発動したジュエルシードに導かれてフェイトがやってくる日。

つまり、なのはとフェイトが初めての邂逅を果たす日。

これは介入しないわけにはいかない。介入しなくてはいけないのだ。

「……………ひろしさん？」

と、思っていたのだが。

「……………ずかの家って、何処だ？」

勇んで出てきたのはいいが、肝心なことを俺は知らなかった。

何てことだ。そりゃあ、各キャラクターの住んでいる住所なんてアニメ本編じゃ語るわけないよな。放送された部分に関しては丸分かりだが、それ以外のこととなるとさっぱり分からん。原作知識を持つことこそが俺のチート能力だなんて思っていたけれど、それだけだとやはり苦しいな。

「あーあ、空でも飛べたら楽に探せるのになあ」

ちらりと神様を見ると、彼は慌てて視線を逸らしながら鼻歌を歌い始めた。

それにしても参ったな。この後、どう動けばなのは達に追いつけるんだろう。

「アニメだと、月村家に向かうのはと恭也はバスに乗っていくんだよな」

「ってことは、結構遠いんですかね」

「かも知れな」

そこまで言いかけた時、俺は道路を走る一台のバスに視線を奪われた。

おそらく市内を走り回っているであろう巡回バス。その中ほどの座席に、前後に分かれて座っている二人の人影を見た。

「神様！ あれ！」

「え？ ……あつ！ ウソ！」

高町なのはと、兄の恭也だ。

そんなまさか、こんな偶然があるだろうか。今、俺と神様の目の前を走り去っていくバスに、なのは達が乗り込んでいる。

迷いなどしなかった。俺はすぐさま駆け出して、バスを懸命に追いかける。

次のバス停に先回りしなくては。乗り込むチャンスはその時だ。

「すごい偶然ですね！」

「偶然なもんか！ こういうのを神様のおしめぼしって言うんだ！」

「おぼしめしですね！」

このチャンスは絶対に逃すわけにはいかないぞ。

なかなか都合の良い展開になってきたじゃないか。オリ主なんだし、少しくらいこういうのもいいだろう。

ってか、今までが報われなさ過ぎるんだ。

道路を走るバスはなかなか止まらない。途中、赤信号にでも引っかけってくれればいいのだが、こういう時に限って信号がタイムイングよく青になりやがる。

ちくしょう。なんて流れの良いバスなんだ。

「ひろしさん頑張つて！ バス停が見えてきました！」

よっしゃあ！ チャンス！

俺は返事が出来ないほどに息を荒げながら、必死の形相で前を見つめ続けた。

やはり車と人間の足。互いの距離差は開いていくばかりで、決して縮まることはない。

「もうすぐです！ ファイトオツ！」

前から気になってただけで、神様つて俺にぴったりついてくるんだよなあ。軽く走っている様子でも速度は俺と一緒だし、でも疲れてないし、俺以外の人には見られないから自由だし。正直なところ、彼こそが一番のチート能力者なのではと思ってしまつう。

「がんばれ！　がんばれ！　ひ、ろ、し！」

うるさい。涼しい顔して言いやがる。

そうこうしている内にも、バス停がどんどん近づいてきた。

よし、ようやく追いつける！

しかし。

「……………なっ！？」

「ええ！？」

そのバス停には乗車待ちをしている人がいなかったことに加え、降車する人もいなかったのだろう。バスはそれほど速度を落とすこともなく、バス停をすんなりと通過していった。

「俺が走ってるのが見えてねえのかよ！」

間違いない。あのバスの運転手こそがオリ主の敵だ。悪意を感じる。

絶対許さん。追いついて乗り込んだら、すぐにでも説教してやるのに。

真後ろから砲撃魔法をぶちかましてやりたい気分には駆られながら、俺は尚も足を動かし続けた。しかし、だんだんと足の動きが鈍ってきて、腿の辺りの感覚が薄れてくる。

ちくしょう、止まれ！　止まれ！　止まれ！

「止まれえええええええっ！」

その時だった。

バスのブレーキランプが光るのを見た。

まさか、俺の叫びが届いたのか。

「ひろしさん！　信号が赤ですよ！」

「うおおおおっ！」

最後の力を振り絞り、俺は全速力で駆け出した。

バス通りからは海が近く、潮の香りが俺の疲れを少しだけ癒してくれるようだ。風向きも俺に味方してくれているみたいだし。

今度こそ。

そして俺は、遂にバスの乗降口に辿り着いた。



がくがくと震える膝を押さえつけながら、俺は乗降口のガラスを叩く。車内を覗き込めば、なのはと恭也が何かとこちらを見ていることにも気が付いた。

バスの運転手が俺の方を向く。  
早く、早く開けてくれ。

しかし、運転手は白い手袋を嵌めた手で前方を指し示し、届かぬ声を発しながら口を動かしていた。

「……バス停から……乗ってください？」

信号が青になり、三百メートル先にあるバス停へ向けて、無情にもバスは発進した。

間違いない。あのバスの運転手こそが俺の宿敵だ。敵意を感じる。絶対許さん。俺に力があるのならば、今すぐにも断罪してやるのに。

真後ろから大型集束魔法をぶちかましてやりたい気分には駆られながら、俺はその場で呆然としてしまった。すると、先のバス停で停車していたバスも動き出して行ってしまった。

「ひろしさん……お、お疲れ様です」

「お、おお、おおおお………」

家の近くの公園。空はすっかりと夕暮れ模様だ。

「今日という日が、終わった………」

「切ないっすねえ」

ベンチに座りながら、砂場に残された遊具を見つめる俺。

もしかして俺って、原作介入をしてはいけないんだろうか。ここまで原作に拒絶されるとは。

今頃、なのははフェイトとの初バトルを終えて、傷ついた体を介抱されているところなのだろう。

「ひろしさん、次のなのはとフェイトのバトルなんですけど」

「いいよ、もう。俺、しばらく休もうかな」

そんなに原作に嫌われているなら、いつそのこともう、この世界で普通の人間として生活しちゃうおうかな。

普通に学校行って、普通に進学して、普通に就職して、普通に年  
老いて。

彼女とか出来るかな。出来るといいなあ。

フェイトに似た子がいいなあ。金髪のツインテールで、綺麗な瞳  
に悲しさを抱いていて。

母親と上手くいってなくて。でも、俺が相談に乗ってあげて、そ  
の子のお母さんに頭下げて、交際を認めてもらって。

お互いに名前で呼び合っちゃったりして。

フェイトちゃん。

セイバくん。

結婚して。

子供も出来て。

とりあえず、嫁は九歳で。

「えっへへへえ」

「ひろしさん！ しっかり！」

「ぼおくうのなーまえをよーんーでえー」

神様に肩を揺さぶられながら、俺はベンチの上で妄言を漏らして  
いた。

そんな時だった。

「サイジヨウインセイバ、だね？」

え？ 誰だ、その名前で呼ぶのは？

俺は驚いていた。いきなり声を掛けられたことにはない。俺が  
呼んでほしい名前と呼んでくれたことに、動揺を隠せなかった。

神様も信じられないと言わんばかりの表情で、周囲を見渡した。

そして俺と神様の視線が、公園の入り口で止まる。

誰だ。誰かがこちらに歩いてくる。

「いきなり声を掛けてごめん。でも、君にはいくつか訊きたいこと

があるんだ」

夕日を背に受けているせいで、顔はまだよく見えない。しかし、俺は知っていた。神様だって気が付いている。

あの声。あの背丈。あの口調。間違いはない。

「ま、まさか」

「何でこのタイミングで？」

それに、彼の右手に握られた杖状デバイスと、威圧感が凜々しくもある立ち振る舞い。

「僕のこと、知っているかい？」

そいつは言った。

知っているさ。知っているとも。

だが、何でお前が俺を知っている？

「まあ、一応こちらから自己紹介をさせてもらおう………時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ」

黒いロングコートの裾を靡かせて、俺達の位置から数メートル離れた場所で彼は止まった。しかし、夕日を作る彼の影は、俺達の足元を確実に捕らえていた。

クロノ・ハラオウン。数ある次元世界を管理する巨大組織、時空管理局の局員である。弱冠十四歳でありながら、管理局内でも比較的高位職であるらしい執務官を務める男。

アニメ第一期では、なのはとフェイトの四戦目に割って入る形で物語に関わるようになるキャラクターのはずだ。彼の登場を皮切りに、物語には時空管理局が関わってくるようになる。

なのに、何故、今になって登場するんだ。

「早過ぎるだろう！ 今日にはフェイト初登場のはずだし、第一なんで俺のことを知っている！？ 神様！？」

「わ、分かりません！」

「君は神様と話が出るのかい？ 誰もいないみたいだけど………まあいい」

そう言うってから、クロノは更に数歩こちらに近づいてきた。

本物のクロノを前にして、俺は思わず後ずさりしそうになった。

「君に訊きたいことについてなんだが、返答次第では、君の身柄を  
一時的に僕達で預からなければならぬ」

「身柄を？」

今、こいつは自分が何と言ったのか、解っているのだろうか。

身柄を預かるだと。それはつまり、早い話が俺を捕らえようとい  
うことか。

「はっ」

「何がおかしいんだい？」

「はははっ」

こりゃあたまげた。時空管理局は、やはり思ったとおりの悪徳組  
織だったか。

時空管理局なんて、次元世界の治安維持を唱えてはいるけれど、  
実のところ極悪集団であることは知っていたさ。

魔力資質のあるものを半ば強引な手口で自分達の仲間に取り込む  
姿は、まさに誘拐犯。自分達の組織が慢性的な人員不足に陥ってい  
るからと言って、そういつたことを平然とするんだ。高町なのはが  
いい例だ。物語としてはまだ先の展開になるが、彼女の素質を見て  
使い物になると判断した途端、一般人であるはずなのはを戦闘に  
駆り出す。そして自分達の組織に來いと誘う。

そんな真似を平然とするような組織。そしてそこに属するクロノ・  
ハラオウンをはじめ、時空管理局の面々。

「腐りに腐った管理局様のお出まし、ってか？」

「なに？」

「ひ、ひろしさん!？」

「俺が一体何をしたと言っただ？ 理不尽かつ、貴様等の自分勝手  
な理由でこの俺を拉致しようとするその悪行……………ふざけるのも  
大概にしるよ」

そうだ。俺は転生オリ主。

悲しい運命を変えるためにやってきた男。

ならば、シリーズを通して悪事を働く時空管理局を成敗するのも、俺の務めじゃないか。

待ち構える第二期も、第三期も、貴様等管理局が根本から腐っているからいけないんだ。

「変えてやる……そうさ、貴様等の曲がった根性から、叩き直してやるよ」

「どうやら、穏便にはいかないというわけか」

クロノが僅かに身構えると、神様が慌てて言ってきた。

「ひ、ひろしさん！ どうしたら管理局が悪者になるんですか!？」

「黙れ」

「クロノが身構えちゃってますよ！ ひろしさんには何も力がないのに!」

「黙れ。つてかそんなにバツサリ言っな」

「でも!」

「大丈夫、俺には力がある」

「え!??」

そう、俺には力がある。それは、クロノの登場が物語っている。

奴等管理局は、資質のある人間を自分達の組織に取り込もうとするんだ。

と言うことは、俺を攫いにクロノが登場した時点で、答えは明白だ。

俺には、資質がある。

魔力が無いだなんて間違っていたんだ。俺には、奴等が欲しがる力が隠されているってことだ。

そしてその力が目覚めるとしたら、おそらくこの戦いにおいて。

「信じていて良かった。俺だって、原作介入に相応しいだけの力が隠されていたんだ」

「信じてなかったでしょう！ さっき思いつきり休むとか言ってたでしょ!」

喚く神様を横目に見ながら、俺は数歩前に進み出て、クロノと向かいあった。

「見ているよクロノ。お前をコテンパンにしてやるぜ。」

「話し合いで済むならばそうしたい。僕は幾つか訊きたいことがあるだけだ」

「お前の話なんてお見通しだ。しかし残念だが、俺はお前達に連れ去られたくはないし、連れ去られる理由も無い」

その通りだ。

そして、俺はビシツと言ってやる。

「俺は、自分の意思にしか従うつもりは無い」

俺とクロノの間を、長い風が吹き抜けた。砂埃が舞い上がり、激突の瞬間を待つ。

「奴はどう来る？ 正面からか。いきなり魔法攻撃か。それとも近接戦闘で攻めてくるか。」

そして、俺の力はいつ解放される？ 戦闘中か。いきなり発動するのか。それとも封印解除には時間が必要か。

心臓の高鳴りが何故か心地良く感じるのは、きっとこの瞬間が俺の待ち望んでいた時だから。

転生者、碎城院聖刃。

参るぞ。

「……………理由が無い、か」

クロノが微笑んでから、鋭い眼光を向けて言った。

「リーゼ姉妹に、痴漢行為を働いたそうだが？」

「なっ!？」

「ひろしさん!？」

その件でしたか。

しかし、ちよつと待て。それならば俺にも言い分がある。

「ち、痴漢行為か。ふん……待て、アレには事情があって、アレだ。誤解というやつだ。触ったと言っても、俺は触るつもりは無かった」

「君は、自分の意思にしか従わないんだろっ？」

「ふん……………たまには、他人の意思にも従う」  
く、苦しい。どうすればいいんだ。

俺は神様の方を見ると、彼は地面に膝を突いて四つん這いになっ  
ていた。

愕然としていないで、助ける。

どうなる、俺。

S e e   y o u   n e x t   t i m e .

## NEXT 5：嗚呼、我が転生人生よ

視線は前方へ真っ直ぐに。背筋もピンと真っ直ぐに。周りの空気は張り詰めていて。

俺は今、非常に息苦しかった。

硬めのクッション。無機質なデザインのソファーに座って、“奴等”が来るのを待っていた。

頭上を見上げてみたって、目に映るのは四角い天井に張り付く眩しい照明。余計なものない、おそらく客人を招く時に使われる応接室みたいな場所なんだと思う。そういう場所なものだから、余計に緊張感が増してきた。

「ひろしさん、落ち着いていれば大丈夫ですからね」

何が大丈夫なんだよ。神様は俺以外の奴には見えないから、完全に傍観者じゃないか。だからそんな気楽なことが言えるんだっつーの。

一言だけでも文句を言っつてやろうかと思った時、壁と同じ硬質素材で造られたスライドドアが開いた。

扉から入ってきたのは、クロノ・ハラオウン。

それと、女性が一人。

その女性が言った。

「突然呼びつけてしまつてごめんなさい。でも、あなたにはどうしても確認しておかなきゃいけないことがあつて」

口調は明るかった。敵意が無いことをアピールするためなのだろうか。

俺が突然招かれたここは、時空管理局が所有する次元空間航行艦船の中だ。

そう、原作アニメにおいて、クロノ達管理局員が地球にやって来るために使用していた船、『次元航行艦アースラ』である。

公園でクロノと出会つた俺は、痴漢疑惑を突っ込まれているうち



にあたふたとしてしまい、思わずクロノの誘いを承諾してしまったのだ。

原作介入をすればいずれは乗ることになると思っていたが、本当にいきなりだったものだから、心の準備が追いつかない。本物のアースラに乗り込んだという事実だけで、俺は酷く動揺していた。

「お、お、俺は別にリーゼ姉妹のお尻が触りたかったわけではなくて！」

「僕達が知りたいのはそんなことじゃない」

俺が座るソファアの前にはローテーブル。そして向かい側には同じソファアが対となって並んでいるが、そこに座ったのは女性だけだった。クロノは部屋の入り口に背を預け、腕組みをしたまま立っている。

「まあ、そんなに固くならないで。そうね、まずは自己紹介をしましょう」

女性は続けた。

「私はこのアースラの艦長を務める、リンディ・ハラオウンです。提督とも呼ばれてまあす」

知ってるよ。時空管理局の次元航行部隊に所属する原作キャラで、アースラの艦長である一面とは別に、クロノの母親でもある女性だろう。俺の原作知識にあるとおり、ポニーテールのロングヘアとボンキュッポンな熟れたボディ。額に見える四つ星の特徴も一致する。

「えーっと……………砕城院聖刃です」

目の前にいるのがクロノとリンディであることは紛れもない事実。しかし、何故このタイミングなんだ？

クロノ達時空管理局が登場するのは、原作アニメの第七話。なのはとフェイトが三度目の戦いをした際、暴走しかけたジュエルシードのエネルギーを察知したからだ。そして四度目の戦いにクロノが割って入ることで、なのは達と出会うことになるキャラクター達のはず。

それが何故、今なんだ？ しかも目当てが俺って、どういうことだ？

「あ、あの……なんで俺のこと……を？」

公園でクロノと向き合った時はあんなに闘志が漲っていたけれど、こうして落ち着いてから改めて対面してみると、どうも萎縮してしまふ。まあ、いきなり危害を加えようとか、そういうつもりではないみたいだから、俺もおとなしくしておいてやる。

「ええ。ちゃんと説明させてもらうわ」

リンディは続けた。

「単刀直入に言ってしまうと、あなたが何者なのかってことについて知りたいのよ」

「……………え？」

今度はクロノが口を開く。

「数日前に君が痴漢したリーゼ姉妹だが」

「あれは誤解だ！」

「あの二人は僕の師匠なんだが、二人から連絡をもらった。第九十七管理外世界、現地名『地球』に、管理局の存在を知っている者がいる、とね」

リーゼ姉妹が俺の存在をクロノ達に知らせただと？

俺は思わず顔を顰めてしまった。あの二人、なんだか知らんが妙なことをしてくれちゃったみたいだな。

「地球の人達は、魔法や次元空間の存在を知らない人がほとんどだ。それなのに、全く魔力を持たない民間人である君が、何故あの二人を、そして管理局の存在を知っているのか。それが知りたい」

「なに？」

俺の一言に、クロノとリンディがきよとんとした顔で俺を見てきた。

まあ、そういう顔をしたくなるのも分かる気はするが、今一度俺に確認させてほしい。

今、クロノは何と言った？

「……………俺に、魔力がない？」

「え？ あ、ああ。君には魔力が無いだろう」

ちよつと待て。それは本当なのだろうか。

神様の方を見ると、彼は「だから言ったじゃないですか！」と返してきた。

確かに、クロノが俺の前に現れた理由は、リーゼ姉妹からの報告があつたからだ。ってことは、魔力を持つ俺を魔導師としてスカウトしてきたという、一縷の望みは儚く消え去つたわけだが。

クロノが俺を連れて行こうとするから、もしかしたらと思つていたのに。

俺には、管理局が欲しがるほどの力が眠っているんだと思つていたのに。

これでようやく、碎城院聖刃の最強伝説が始まるのだと思つていたのに。

「ほ、本当に無いのか？」

頼む、嘘だと言ってくれ。

「無い」

「ちよつとよく調べてみたらどうだ？」

「無い」

「ちよ、ちよつとぐらい……………ちよーつとぐらい何かあるだろ？」

クロノは一度だけ大きなため息をついて、それから静かに話を始めた。

「魔力を保有する人や生物には、魔力の源となる器官がある。これを『リンカーコア』と言うんだけど、ここ、第九十七管理外世界には、リンカーコアを保有している者は極めて少ないんだ」

そんなことだつて知ってるよ。俺は転生者なんだから。原作知識があるんだから。

なのはみために、魔導師としての素質がある奴なんて、地球じゃ滅多にいない。だから地球人は、魔法が使えないんだ。

だが、俺は転生者だぞ？ 転生オリ主だぞ？

魔法が使えなくちゃ、リリカルなのは世界に絡み辛いじゃないか。

何のためにこの世界に転生してきたのか、分からないっつーの。

「お、俺にはリンカーコアは……………」

「無い。計測器で測ったわけではないけれど、でも、君と魔力的な接触コンタクトをとるうとしても一切反応が無いから、おそらくそういうことなんだと思う」

「そんな……………それじゃあ、俺って本当にただの一般人じゃん」

「そういうことだな」

「こんな報われない転生オリ主なんて、はじめてだよ！」

何だかボディーブローを喰らって頭が下がったところで、トドメのアッパーをぶち込まれた気分だ。俺はソファアの背もたれにへたり込んで、天井を見上げた。

そんな状態でも、リンディは相変わらずの明るい声で言ってきた。

「そう。あなたはただの一般人」

「があっふうっ！」

「なのに、私達管理局の存在を知っている。これって、一体どういうことなのかしら？」

ぼろぼろな俺の精神は、リンディの投げかけてきた質問によって少しだけ回復を遂げた。

もう仕方が無い。この際、魔導師としての聖刃は諦めよう。

考えを改めてみる。現状をよく見てみると、原作ではまだ出てくるはずの無いクロノやリンディが俺と出会っている。リーゼ姉妹に出会ったことも踏まえて考えれば、あの猫姉妹は俺の存在を意識しているということ、第二期シリーズ介入への布石もばっちり出来ている。

これはこれで、一つの原作介入と捉えるべきじゃないのか。

そうだ。ちよっとポジティブになろう。原作に関われるんだったら、転生者らしくなれるんだったら、もうなんだっていいや。どうせ転生オリ主としてやって来た以上、悪の組織である時空管理局も

俺が根性叩き直してやるうかと思っていたし、ちょうどいいじゃないか。

そう思ったら、だんだん元気が出てきた。

よし、だったらここから介入しよう。

おめでとう、俺！ 今日から念願叶って原作介入開始だ！

「……………俺が何故管理局を知っているかだつて？」

含み笑いと共に言い放つと、クロノとリンデイが明らかに緊迫したのが伝わった。

「どうやら、俺の正体を明かさなくてはならないみたいだな」

「正体、だつて？」

「そう。俺の正体……………それは、転生者だ」

「テンセイシャ？ 一体それは何かしら？」

リンデイの声を聞き終えた後、俺はソファアールから立ち上がって不敵に微笑んだ。

転生者とは、お前達原作キャラを新世界へと誘う運命の導き手。

俺がいるからにはもう大丈夫。お前達を、本来の運命よりもずっと清く、正しく、美しい行く末へと連れて行ってやるう。

「お前達の運命を変える者、とだけ言っておこう」

「どういうことかしら？ はつきりと教えてくれない？」

そんなことをする必要などない。お前達は、俺の手によって真の道へと導かれていればいい。

「訳が分からないぞ。転生者ってのは、一体何が出来るんだ？」

生意気な口だな、クロノ。

まあ、お前のような頭でっかちで堅物で悪の手先である輩を黙らせるには、その身に俺の凄さを刻み込むしかない。

「お二人さん」

「なんだ？」

「良い事を教えてやるう……………近々、地球で小規模な次元震が起るだろう」

そう言つと、部屋の中には更なる緊張が張り詰めた。

「次元震ですって？ いや、それよりもあなた……………」

「回避したければ、俺を嘗めないほうがいいぞ。ふっふっふ」

「……………まさか自分を預言者だとも？」

「転生者だ」

「そうだ。俺は転生者なんだ。」

持ち得た原作知識を駆使し、この先に待ち受ける出来事を把握し、それを俺の強さとして利用する。

そして俺が正しいと思った道へ、皆を導いてやればいいんだ。

プレシアの言いなりになっているフェイトの目を覚まさせてやるのもいい。

なのは達を利用する外道管理局のクロノとリンディ。この二人に本当の正義を教え説くのもいいだろう。

起こるべき惨事を事前に防ぐことで、自分を周囲に認めさせるのもきつと楽しい。

やりたいことは、やるべきことは盛りだくさんだ。

嗚呼、ようやく俺にも運が回ってきた。

「……………君は」

クロノが険しい顔で言った。

ふん、そんな顔が出来るのも今のうちさ。

俺はこれから、転生者としての務めを思う存分堪能させてもらう。

「艦長！」

クロノがリンディを呼んだ。

なんだなんだ？ 大好きなママにたちゆけてほしいのか？

外道管理局員は、俺にへりくだれ！

「……………そうねえ。確かに、放っておくわけにはいかないかもね」

「え？」

二人の視線が、俺に注がれていた。

その視線から感じる事が出来る気持ちは、敵意に近いものがあった。

「な、なんだ？」

「公園でも言ったとおりだ……… 砕城院聖刃、君を自由にさせるわけにはいかない」

「は？」

「どういうことだ？」

「管理局の存在を知っていることだけならまだしも、次元震の発生予告までされてしまったんだ。次元震は、たとえ小規模でも大きな危険を孕んでいる。だから君を放っておくわけにはいかない」

「なんかマズくないか？ まるでこの会話の流れ、俺が次元震を引き起こすみたいじゃないか。さっきのは犯行予告じゃないんだぞ。」

その時、クロノが公園で言っていた一言を思い出した。

“君の身柄を一時的に僕達で預からなければならぬ”。

ちよつと待て。待つてくれ。

こいつらに捕まったままじゃあ、俺はなのは達に絡むことが出来ないじゃないか。

何故そうなる？

「ひろしさん！」

突然、神様が俺に向かって声を上げた。

「そうか！ こういうことだったんですよ！ リーゼ姉妹の狙い！」

「え？」

「朝言っていたじゃないですか！ リーゼ姉妹は何をしていたんだろつて！」

だからそれは、第二期シリーズでの企みの下準備だつて。

「下準備だったんですよ！ 二期での企みをスムーズに進めるための下準備中だったんです！ だけど、そこにひろしさんが現れた！知られてはいけない自分達の存在を知っているあなたが現れた！だからあの二人は！」

「あつ！」

「あなたに企みを邪魔させないため、クロノ達へあなたの存在を知らせたんです！ あなたが邪魔さえしなければ、彼女達は原作どおりに裏で糸を引くことになる！」

要するに、彼女達自身は知らずとも、リーゼ姉妹は結果的に俺の原作介入を妨害しているってことか。

俺って、もしかしたらあの二人に余計なことをした？

これはまずい。非常にまずい。

クロノ達と接触することで、原作介入できました。やつほー！

なんて言ってる場合じゃない。このままでは、介入と同時にオリ主ライフが終了する。

どうしたらいい？ どうしたらいいんだ！？

「艦長、やはりしばらくの間彼の身柄を」

「ちよつと待つてください！」

自然と、気持ちは下手したてに出ていた。

「俺には家族がいるんです！ 生活もあるんです！ 学校にも行かなくちゃいけないし、この歳でお父さんお母さんを泣かせたくはありません！」

へりくだれ、俺！

「しかし艦長！ 彼から目を離すわけには」

「お願いですリンディ提督！ 何卒ご慈悲を、ご慈悲をおおおおおつ！」

「あらあらー。これは一体どうしましょうかねえ」

右手を頬に当てながら、リンディ提督がにこやかに言った。

と、言うわけで。

翌日の俺は、なんとか無事に学校に通うことが出来ている。今はちよつど、朝のホームルームの時間だ。

昨日、アースラ艦内において、クロノとリンディ提督と俺の三人で話しあった結果、俺の身柄拘束の話は一応回避出来た。

次元震の発生予告だって、俺自身が引き起こすわけではないことを説明したところ、リンディ提督はとりあえず納得してくれた。意



外と話の分かる人で助かった。

それでもクロノからの疑いが晴れることはなく、俺は通常的生活を送ることが許される代わりに、一日のほとんどを監視されることとなった。

その監視役が誰かと言うと。

「今日は転校生を紹介します」

「……………ク、クロノ・ハラオウンです」

黒い学ランがお似合いなこと。

顔を引き攣らせながら教壇に立つクロノを見やりつつ、俺は露骨にうんざりした表情を浮かべた。

この“学生クロノ”というのも、リンディ提督の考え出したことだ。証拠不十分によって身柄拘束にまで至らない俺を、この地球上においてごく自然な形で監視をするためという、至極全うなようでもしかしたら面白半分なんじゃないかというアイデア。

クロノも案外大変なのかもしれないな。

俺の隣に立つ神様が、微妙に困惑しているような顔を浮かべていた。

「なんだか、妙な展開になってきましたね」

「本当だよ。このままでと原作とかけ離れていくんじゃないの？」

「僕としては、そういうのはちょっと嫌なんですけど」

「嫌って何だよ……………そんなこと言ったら、俺だって四六時中監視されるんだから嫌だよ」

こうして、転生オリ主である俺、碎城院聖刃の妙な原作介入がスタートした。

学校内では、何処へ行くにしても、何をするにしても、クロノが俺のことをじっと見てくるのでげんなりしてしまう。しかし、周りの先生や友人達には、どうやら“転校生の面倒を見る山田”という風に映っているらしい。

監視されてばかりというのも癪なので、俺は逆にクロノの様子を監視してやることにした。

数学の時間。弱冠十四歳でありながら執務官を務めるクロノは、やはりお勉強が出来るみたいで、教師の出題する難問もスラスラと解いて、クラス中を驚かせた。

歴史の時間。地球の歴史はさすがに知らないことだらけだったよ。うだが、お利口さんよろしく、休み時間に予習をこなすことで、授業にはばっちりついてきていた。

自習の時間。落ち着いた雰囲気と女受けのいい顔立ち。だけど小柄な体格というギャップが良いらしく、クラスの女子生徒に取り囲まれていた。正直に言って羨ましい。

体育の時間。分かっているよ。こいつは戦闘もこなせる魔導師なんだから、分かっているっつーの。だから女子生徒もいちいち黄色い声飛ばしてんじゃねーよ。

「まったく、艦長の思い付きにも困ったものだよ。こんな僕の状況を見て、絶対に楽しんでるからな」

「はいはい、そうですかそうですか。モテる男は辛いですか」  
こいつだけは許さねえ。お前は出来過ぎ君かつつーの。なにやらとても完璧で、外見にも恵まれていて、魔導師としても優秀で、お前は何処のオリ主だよ。

放課後になると、俺とクロノは並んで校門を出た。

それにしても妙な感覚だ。なのは達の原作キャラと一緒に登下校することへ憧れを抱いている俺だが、いくら原作キャラとは言えクロノと一緒に登下校するとは夢にも思わなかった。

「さて、じゃあこれからは、約束どおり」

「分かっているよ、分かっていますよ！ アースラに行けばいいんでしょー！？」

俺の監視はまだまだ終わらない。

学校生活はクロノがこちらの生活圏に介入していたが、放課後は逆に、極力こいつ等の目の届く範囲内にいるという約束を交わしたのだ。その結果、自宅には晩飯と寝泊りだけで帰るようなものになっってしまった。まあ、アースラとの行き来は転移魔法で送り迎えし

てくれるということだから、移動時間はあつという間なんだけど。

俺がリンディ提督に弱みを見せてしまったことも悪いのだが、彼女にはすっかり頭が上がらなくなってしまった。

艦内にやって来ると、さっそく彼女が出迎えてくれたことに對して、俺は深く頭うぶを垂れた。

アースラ内にいる間は、目の届く範囲であれば特に厳しい制限もなく、自由に動けることになっている。だが、ぶっちゃけ何もすることがない。

そうしていると、リンディ提督に呼び出された。

「ちよつと付き合ってもらえないかしら？」

「なんででしょうか？」

彼女は艦内のとある一室に俺を招き入れた。

「これこれ。地球のお茶なただけけど、一緒に飲んでみない？」  
やばい。

彼女が用意したものだ。それは、抹茶だった。

日本の伝統的な茶室を模したそこには、茶を点てる準備が整っていた。

そう言えばこの人、苦い抹茶にミルクと砂糖をたっぷり入れて飲めるんだよな。

嫌な予感がする。

体が自然と嫌がっているのにも関わらず、リンディ提督は楽しそうに笑いながら俺を導いた。

「真似事だけれど、楽しそうでしょう？」

そう言っただけで、茶を点てた。

彼女なりの味付けも、もちろん行われた。

抹茶の入った茶碗に、角砂糖が放り込まれる度に、俺は心の中で「真似じゃねえだろう。それはお前のオリジナルだろう」と呟いた。  
「どうぞ」

差し出されたそれを、俺は飲みたくない。

しかし、頭が上がらない俺には、選択肢は一つしかなかった。

嗚呼、こんな形での原作介入を、誰が想像しただろうか。

「けっ……ごふうっ！ 結構な、お手前で………」

俺はこのお茶の味こそ、俺の転生ライフそのものではないかと思  
ったのだ。

S e e   y o u   n e x t   t i m e .

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6798y/>

---

転生NEXT

2011年12月7日02時48分発行